程の其入用御かけ被遊所詮六ヶ敷事へ引かゝり居大機會をのがし候も殘念千萬に御座候間思召には被爲叶間敷候へ共一等御目安を御下け被遊まづ外々の土地を專らに御望み前文之通り御永續と御土地御引がへの場合に至候はゝひた〳〵其筋へ御賴み膏腹の地御引受御勝手向の根本御固め被遊候御義當時に於ては却て御一等の御手順と奉存候尤私發足前　御意には此度の儀更に御いそぎ不被遊との御義には御座候得共右は□千載の後は北地も御整ひ可被遊との御含と奉恐察候處其儀は一向只今よりは前知仕兼候義勿論に御座候いづれ千載之後は何れと歟一變仕候は差見へ夫も　上公思召之通りによく一變仕候へは思召も可被爲叶候へ共極正論の世の中に相成候はゝ北地は　公邊の御持に可相成極姑息の世にては是迄の通りに可相成何れ只今の姿にて越前殿抔も不相替　上公御力に相成候世の中に無之ては思召樣には安心不仕右の越前殿迚も當分は全盛に御座候間必衰之理も有之左候へば此度御添地尾州越前家等の引張有之內　西天も御別條不被爲在候內に候はゝ却て御賴母敷も可有御座追て外々の土地さへ御六ヶ敷剩御永續の一萬外五千さへ御取締抔申事にも相成候はゝいよ〳〵土地の御臺を御失ひ被遊如何とも被遊方有御座間敷哉と一同痛心仕候仍て何卒前件之意味篤く御判談之上　上公へ得と御申上に相成此度は尾州紀州へ連續致し候程の御土地さへ相濟候はゝよろしきとの御意相伺度奉存候迚先日の御進達を御引かいと申にも無之又　上公には北地は最早思召切候とはゆめ〳〵不申述全く去年來御進達之まゝに据へ置早く申候へは江水皆樣御始め御役方一同一致盡力仕候と　公邊御役人中も疑惑不致ふみこみ御世話申上候樣仕向け候との二つに御座候左も無之候て は難題をせめ付候姿にのみ落入却て無術のやう愚慮仕り候夫とも去年以來の御願面北地一條に貫き居候へは致方も無之御損も覺悟の前と申氣味有之候へ共前文之姿にては實に殘念千萬に御座候北地之御主意は私御側に御奉公仕居候節より十分奉承知居義故決て ゆるかせに仕候義に

は無御座候へ共諺に申候あぶも不取蜂も不取と申樣相成候ては御同樣奉恐入候故存分相認御相談申上候昨日越前守殿の申聞今日休藏の口氣等にて大體分り一日二日の機會をも爭候間否早速御評議〻上御伺御座候樣仕度此段申上候以上

十二月朔日

尙々本文〻趣私より封書にて可入御聽とも奉存候處御一大事儀聊も文義異同等より行違ひを生しては不相濟候故別段呈書不仕候間宜入　御聽候樣仕度此段も爲念申上候以上

此書虎より申出候否此方家老初一同虎〻申聞を尤と思ひ卽功の方に致度我等へ申聞有之候處添地內願の義に付て當初より家老は六ヶ敷と申我等一己の調にて漸申譯いたし進達書を持せ遣候位の事にて役人の方にては扱不申位故縱此度整不申候とも我等の弊の惡敷にて五萬十萬の土地を取そんじ候といふ迄にて先祖よりつたへ候土地の滅にも無之猶又虎書面一覽致候に休藏の云々申候に平太左衞門虎を初驚候樣子なれ共我等の考へにては存〻外松前の賄にてもうげ賴候かも難計勘定奉行にて膏油の地願候よりは北地の麁地願候方　公邊御分限に不拘候故好候半夫故に休藏がおどしに申聞候半何も北地の主意を勘定奉行等へ申聞候共內願の大害に可相成事も無之被察候扨休藏の大害と申候が却て面白く被存候故卽刻三通認家老共へ相渡虎之介迄爲登候樣申聞候處夕刻に相成承り候處未指出由故奧右筆部屋へ自身參り頭取へ申付漸々に指登る三通の書面委細は事長き故略す大意はやはりどこ迄も北地の義申候て先より外の地に相成は兎も角もやはり午年以來の宿願を申遣候事扱又申付候ケ所々々え說候はゝ下り候樣申遣す

（頭書）家老初は前々申如く卽功有之方に致方又明日も我等へとき候心得にて虎への書面不指出置候よしなり

一平七が申聞に外にならば備前守初拙者等十分盡力云々有之候へ共添

地の義に付ては午年以來我一人へ任せ置此度は模樣宜敷と存ケ樣申事
にて尤家老初骨折の數人へ入も不苦候へ共今加候て我等存候處の妨に
相成候ては午年以來の骨折無に相成候故右之答は一切不申遣候
（頭書）添地の義は家老共何れの地にても六ケ敷我等に出來候ならは致
し見可申と午年に申候ひき左候へは此度模樣のよろしき故右の如く
申候て少々惡敷相成候へは直ににげ候故賴み不相成不入方と存切候
但大久保戸田は側用人の節より手先につかひ申候へ共平七は内願書
を持出候のみ也

謹奉申上候此度御内願御一條に付爰許事情等委細に一昨二日義太夫始へ
文通仕候間是より入　御聽候義と奉存候扨北地之義は第一の御志願に被
爲在候處此度御整へ相成候ゑは御殘念に可被思召候得共去十月中平七を
以御老中へ爲御達の本文幷別紙口上覺之面は北地御六ケ敷に付ゑは何れ
の地にてなり共　公邊御差支無之所にて御拜領と申文義にて右御願之趣
公邊へ今以とまり居此度は右之御再願に御座候へは又々最初へ立戻り北
地とは申兼候手續に相成居殊に右手續にも不拘申述候へは一と通りに受
流し置押付に何萬石御增御永續等御引上けと被仰出候歟も難計候間北地
は元より之志願には候へ共御六ケ敷も候はゝ何れの地にてなり共分限摺
合候程に被成下度夫に付ゑは永續等と御引がへのみにてはかゝりまけに
相成候間御永續等丈之土地と外に國役郡官其外諸懸を見込其外に餘程の
有餘無之候ゑは被相願候詮無之と申處をせめ申度奉存候御土地出來二三
萬兩も年々御あまり御勝手御取直し御武備等御手厚に相成候はゞ夫こそ
北方の大任御引受被遊候迚も御差支有御座間敷奉存候此度は尾州等の引
張ぬけ不申内膏油之土地御引受之方御上策と奉存候委細は一昨日相運候
間此たん奉汚　御聽候以上

十二月四日　臣　彪

追ゝ奉申上候兼々の御意に棒程願て針ほど叶と御意被遊候間北地を專ら御願にて漸々外の土地御願被遊候はゝ御金抔と相成可申哉　思召も難計候へ共左様には無之様奉存候棒と針と大小は違ひ候へ共何れも棒の類に御座候間棒と申候へは針ほとは叶ひ候處北地と外土地とは同し土地とは乍申意味相違仕り譬へは同し食物にても酒とまんぢうと申如く故しきりに酒をねだれ候へは所詮まんじゆうにては氣に入申間敷何れも見合候外無之との評議に相成可申哉と苦心仕候先き方にて酒を振舞候心有之候へはよろしく候へ共何れにも此節は下戸の世の中扨々不及是非奉存候仍ゝは十五六萬と望み候はゞ十萬も濟可申夫にてこそ棒の意味に叶ひ可申奉存候扨又鯨は大魚に候へ共シャチの衆力にて云々是も兼々被仰付候へ共北地ゝ談出來候人は越州ゝ外無御座其外大澤内藤等いまた對談は不仕候へ共何れも俗物下戸に相聞へ申候僅に一人の頼みに仕候越州さへ此節の模様にては受流し置すつと外御土地可被仰出顔色に相

見候間何卒呼出し不申以前シャチ共をまんぢうの方へ張込せ大魚をも動し候はゝ多分御成就に可相成奉存候乍併此地は元より御志願故思召切とはゆめ〳〵不申述候間其段は御苦勞不被遊候様仕度此段恐をも不顧存分奉申上候以上

本文に去十月云々もやはり我等意は北地へ持こむつもりなれは文面にはかゝはり不申　公邊御指支無之地抔申やはり調候はゝ北地より外は有之間敷といはせん爲也北地が元より御志願故思召切候とはゆめ〳〵不申云々たとへ右やう不申候ても外をつよく申候へはいとゞ六ケ敷處は猶々六ケ敷相成事故たとへ内願一切不整にもいたせ最初より申含候通りを所々へ申候やう申遣す扨虎は先に我等が申候處のみを思ひ如本文申聞候へ共我等は大魚の模様惡敷時はシャチの衆力を以よせ候へば大魚も岸へよせ若又シャチの模様惡敷時は大魚を動し大魚一はねする時はシャチも飛のかする物也右書湊へ著故直に近書三通認宿次を以虎

迄申遣す事長ければ略す大意は最初我等見通し候通りやはりどこ迄も北地の義申述夫か六ケ敷て先より外の地と出候はゞ其節は十五六萬の地を申方可然由申遣候大意は虎の返書にても可相分候

謹ゐ奉申上候此度御内願ゝ義に付去る二日御國家老共迄申遣候義も御座候處早速入　御聽候由にて御筆御下け被遊やはり最初被仰含候通りどこ迄も北地專らに御頼被遊夫にゐ外々の土地と變し候は不得已仍ゐは更にあせり不申尤　西天晩景に不相成内所々へ遊説仕候樣御下知ゝ趣委曲奉畏候過日も申上候通り去る晦日愚臣西丸下へ御使相勤當月朔日平太左衞門義田中休藏へ罷越翌二日同人内藤隼人正へ罷越候のみにてまづ御下知相待居候處昨七日右御筆ゝ趣承知候間早速土産品等用意仕り近々内藤大澤へ罷越委曲に演述仕候心得に御座候

一膏腹ゝ地と御引がへに御座候はゝ一萬五千御引上けにて不苦候へ共北地にては一萬五千御引上けにては差支候旨愚臣口外不仕候樣原田兵介へ御下知ゝ趣同人より申來候處北地は元より難物ゝ義を御願被遊候に一萬五千をも御居置抔申ゐはます〳〵出來ぬ相談と申ものに御座候間右樣ゝ義は先日も聊口外不仕此上迚も口外可仕理無御座候

一西天御模樣ゝ義は今曉彦九より申上候由其後御模樣不相分候　公方樣是非西丸へ御登城可被遊筈ゝ處近來御城書にも絶ゐ不相見候へ共極々御内通りにゐ被爲成候義にも可有御座哉例ゝ通深秘仕候故相分り不申候今日宿次出候にさしかゝり候故乍恐大略御請奉申上候以上

十二月八日午中刻　　臣　彪　上

御親書御下け被遊謹ゐ拜見仕候上戸下戸ゝ譬申上候處右に付委細御下知ゝ趣奉畏候逐一に御請奉申上度候處右ゝ義は一昨八日にも御請申上尚又今日御年寄共へも相運候義も有之定ゐ是より入　御聽候半奉存候間乍恐一と通り御請申上候どこ迄も北地を御貫き被遊不得已候はゝ御永續等ゝ外三萬も御高潤ゝ場云々ゝ儀委細奉畏候以上

十二月十日夕　臣　彪

別紙奉申上候本文あまり一と通りに御請奉申上候間御疑惑も可被遊候處御書之趣逐一奉畏候故右之趣を以明日明後日と内藤等へ説付候心得に御座候只今宿次差懸候故大略に御請申上候段奉畏入候以上

十二月十日　臣　彪　又上

去る七日御出仕之御書面今曉明七ッ時著拜見仕候然は御内願御一條に付爰許御同列樣御判斷之趣幷愚意之趣等委細御相談申上候付早速　尊慮御伺に相成候處　上にはやはり第一の北地を始終御貫き被遊右之義御六ケ敷彼等より外御土地被仰出候は不得已との御見識御動き不被遊候由いかさま年來之御宿願一寸の御模樣にて御動き被遊候樣にては實に北地御手に御入被遊候迚も御退屈も可被遊と申御意味に御座候處乍恐始終御貫き被遊候段中々凡慮之及候義に無御座奉敬服候私抔了簡は第一の御願を强く申張候はゝ第一の御願も成就不仕のみならず第二の御願も二半に可罷成との内存に御座候處　上公思召は第一を專らに被遊候はゝ第一の御願相整可申萬一不相濟候とも却て第二の方數を增勢可有之との御胸中と奉恐察乍恐右も第一理被爲在候御義頻て愚意申張候義も無御座候間兎も角も尊慮之通相心得其筋々へ申談尤進退懸引等之處は私は私だけならでは出來不申候間其上は天に任せ候心底に御座候

一登り前御下知尙更御差圖に其筋々へ御贈品等之義は兩地御往復に不及爰許限にて取扱候樣にとの御事に付爰許御同列樣幷武田等へも申談候處去月晦越前殿の口氣其外奥右組頭等之口氣にても調中には相違無之左候得は越州殿へ御鐙等被遣候のみにては如何敷やはり去年中の御見合にて御老中御始夫々へ被遣候方可然と御相談に相成左之通り取扱申候

（付札）本文認落候中野又兵衞へも銀十枚代り七兩貳分被遣に仕候又兵衞は御城付對談之節兩度共に御守殿廻りにて　大御所樣へ目出度もの御獻上御内願之義をも御かざし被遊度との申聞候よし然る處　御守殿へ御

頼之義は乍恐御承知被遊間敷奉推察候故是迄不申上候もし其御地御評議にて思召も不被爲在候はゝ何ぞ御獻上も可被遊哉尤御内願之有無に不拘申上候迄は無之候へ共御祖父様の御事故御病中御慰に御獻上は御座候ても可然哉此だん御評議可被下候

（頭書）付札末文之義申聞以前より江戸老女の方へ申遣置折々重づめ抔指上申候ひき少も内願等に不拘様に有體に申候とても　上物位にて叶ひ候内願にてはしれたる物にて兎角早くきめを取候ては不宜落命の後は何程良醫にても藥の考も出來不申長く引はり候が我等の一策故内願書下りも不致又叶も不致引張ある處に妙策あり

但御不例に付御伺と申す御口上は以之外と奉存候爲念申上候

一五両判　五枚つゝ

是は御城付扱にて御國産代りの振にて去月中被遣候

一右同斷

内藤
大澤
田中

是は右同斷　當月初旬被遣候

一黄金　二枚つゝ

鮮鯛　一折添

但越州へは別段三枚

右は去る三日御城付御使にて被遣候處例之通り以使御禮申上候

一黄金　二枚

交肴　一籠

水野濃州殿へ

右は昨九日私御使にて被遣候

（頭書）本文國産の代りと申義如何たとへは黄金の代を白銀等にて遣候か又は馬の代金子にて遣候抔は格別何品ともなく國産の代といふ如何なりされど先々ては取さへすればよき者也可笑

先つ右之通り被遣候此度私への御書にては越前等へは遣候に不及御勘定等へ被遣候様御下知被爲在候處前文之通り登り前御下知も被爲在尚又先

御老中方御四人

頃武田へ御下知にも越前へのみ御内々被遣候は不宜去年の例にて扱候樣御沙汰も御座候處御大事の機會殊に萬々一　西天御差合等にては諸家へ被遣候品も一切被遊兼候樣相成候半と右之通取計候事に御座候

一御側衆之義は入　御聽候時の口にて只今はいまだ早過き可申哉に候へ共本度に御きまり以前御内慮を經候樣之義も可有之何れ御早き方御損は無之奉存候間昨九日案内申遣候上美濃殿へ罷出候處八半時過に候へ共いまだ退出無之暫待居七ツ時退出にて出會被致候間一と通り御口上申述御内願之義そろ〳〵申出候處是は悉く平氣なる事にて中納言樣には蝦夷地御好みに有之候ひき此度も定而右御願歟抔被申候故仰之通り第一の心願は北地之旨相答右之儀迚も御六ケ敷候はゝ尾紀へ致連續候程之御土地被下置度旨委曲申述候處夫々可然挨拶に有之大意は我々持前は年寄衆調之分を入　御聽候役目に候へは自分より事を起候義は出來不申年寄衆より相廻入　御聽候場に至候はゝ何分追々の御志願篤く相含み可申との事に御座候尤是は御側衆定例之文句に御座候へ共其顏色等を相察候に未た御側へは更に廻不申やう愚察仕候銀次郎樣には委細美濃殿の模樣御承知と存候處愚察仕候處にては御側衆も大切の御役方とは乍申小事は格別此度の如き御大願に至候て尙實に御老中次第の樣子且御老中等と違ひ此方に譬て申さば御鷹掛御小姓頭取抔申如く御政體の所抔には深くかまひ不申南地にても北地にても御老中持出次第御取次可申と申す氣味に相見申候人物之目方は矢田登の風體へ中山庄司左衞門の利口を帶候位と鑑定仕候無益の事乍ら筆序に申上候

（付札）得と相考候へは本文人物御間柄も御座候處不心付相認候段御用捨可被下候

一右對談之節よき序と奉存候間　大御所樣御容體　上にも御在國中と申遠方之儀別而御あんじ被致候間御内々私を以御容體承知被致安堵被致度旨御口上の振にて申述候處御尤千萬之御儀尤御容體之義は悉く意味有之容易には口外不致候へ共折角御尋之事故御内々申上候先達ては一旦餘程

御心よく被爲在候處折々御不出來有之御不出來〻度毎に御引かへし相成
兼候と申す御容體にて誠に心痛仕候處九日の口上に昨今は先つ御平らと
も可申上哉との事に付御食量〻義如何と申候へは一日に百七八十匁つゝ
被召上候へ共是は却て御醫師も心配右よりあかり過き不申候樣精々申出
候よし御通利如何と申述候へはされば其御通利無之候故御水氣御まし被
遊扨々心配仕候との事に御座候元來無類の御丈夫樣なる御方樣と奉存候
間此上は取置し可被遊哉に候へ共何れ御難症と恐察仕候
一内藤大澤へも私參候趣先日御城付を以申込置候へ共今以挨拶無之仍ゐ
今明日〻内御品遣し（私全くから手にても參り兼候間御國產の御品中納言樣より被遣候振にて浮龜井五色唐紙等被遣候筈に申合候）内藤へ
一日大澤へ一日對談〻積に御座候　上よりはしきりに御催促被爲在候へ
共御精進日又は先方差合且は例〻通り御品揃候へは箱の寸法間違候類段
々延引奉恐入候諸事御推察可被下候
一上には御取調かゝりへも罷越候樣御下知被爲在候處此方へ罷登り候上

能々事情承候に右は最初御老中へ御進達〻砌平太左衞門營中にて石原孫
介へ逢屋形〻願は御承知かと尋候へは孫介挨拶に右は一向承知不仕何御
願と申候故少々咄候へは夫は私は不存もし御取調へかゝり候歟とちらと
申候を例の平太左衞門是は御取調へ懸り候と呑込御國へ運ひ候故　上よ
り追々御取調へ内談〻事平太左衞門へも被仰付候付平太左衞門も不得止
渡邊三郎介（御取調のよし）へ談候處一向存不申候よし仍ゐ又々竹内清右衞門とか
へ談候よし是も一向存不申よしあまり取付樣無之付三郎介へ被遣品にて
も有之可然と心組序〻節三郎介へふつかけ候へは御取箇も數人〻義私の
み戴候義は實に差支候故御免被下候樣其上右樣〻義は專ら奉行扱の事故
我々共へかゝり不申少しもかぎ付候はゞ御如才は不申間云々と申氣味の
よしに御座候仍ゐ愚考仕候處御勝手懸りは御國にて申候はゞ原十左衞門
等の立場御取箇は勘定所の樣なるものと相見候物のきまり候跡を割付候
役目にて申さば死物御勝手懸り〻方活物に可有之第一に御勝手懸りにて

御分限御損益等取調其後に爲割付候所を御取箇相勤候事にも可有之且此度の如き儀御老中〻外にては大澤内藤（明樂老病當時は諸事内藤あつかひ候よし）次に中野又兵衞等にて大ていきまりたり候半と存候へは旁此上の模樣次第御勝手をも御取箇をも御藥等ふりかけ候は可然候へ共私罷越對談等は出來兼候釣合御座候間此段宜御申上に仕度候此方にてちらと鑑定仕候義を申上候へば直に其所へ御下知被爲在候樣にては前文〻通り差支出來殊には人々こり候て事情を不申候樣成行候間乍恐大意は御下知被爲在其外進退懸引〻場合は乍不肖御任せ被遊候樣仕度候事に御座候一體當職にて御役方へ遊說仕候は御勘定吟味役かきり位にて其下々は懇意又は親類にも候はゞ格別駕籠馬上等にて御勘定迄遊說仕候は不得體夫にも無頓着關十兵衞抔の如く罷成候ゟはやはり賄賂等にてのみ事を仕候樣罷成可申一體御當代の御願は乍恐俗語のこはもてと申氣味に御座候間是等の事情御洞察被爲在候樣仕度存候惡しく仕候へは私一身をりきみ御勘定等へは不罷越歟との御察當も可被爲在候哉と此段申上候

右件々御一覽〻上不苦候はゞ御序に被仰上に仕度宿次序に付此段申上候

以上

十二月十日　　虎之介

義大夫樣
甚五左衞門樣
銀次郎樣

以書附申進候御再願の一條に付時候爲御尋去る三日御老中方へ別紙〻通夫々被遣候處右爲御禮越前守殿中務太輔殿には表御玄關へ使者被指上備後守殿大炊頭殿には御城付御長屋迄使者被指上候御別紙口上書御年寄若年寄衆へ入御覽候處我々より申進候樣被仰聞候間御年寄衆へも御申上被入御聽候樣存候仍ゟ別紙相添此だん申進候以上

十二月九日

兵介　様　　傳五郎
長八郎様　　惣三郎
唯之允様

本文時候御見舞として云々先日武田へも去年遣し候振合書拔遣し候へは繁務中内願之義に付別ゑ御世話に相成氣之毒致候故云々と申遣しよろしき處如何して斯樣扱候に哉若又先へは先日我等より申遣置候通り申添候を右筆頭取共不案内にて時氣尋　存認候にや時候尋にてはよすきたる贈物也可笑

水戸中納言様

時候爲御尋昨日は以御使御目錄之通拜受仕誠以忝仕合奉存候右御請以使者申上候

十二月四日

御家老中迄
水野越前守使者
田口惣右衞門
御取次　彦太夫

水戸中納言様

時候爲御尋昨日は以御使品々拜受仕誠以忝仕合奉存候右御請以使者申上候

御家老中迄
水野越前守使者
田口惣右衞門
御取次　彦太夫

十二月四日

如此同樣の事にて申には不及候處全く一方は別段物之禮に候や

右越前使者口上覺書は生紙半切

向寒之節御座候得共益御機嫌能被成御座珍重之御儀奉存候然者時候爲御尋御内々御覺書通り拜受仕難有仕合奉存候右御禮以使者申上候間可然樣御執成賴入候

太田備後守使者
長鹽平十郎

右太田のは越前紙半切

水戸中納言樣
御家老中迄
、脇坂中務太輔使者
田付傳治

時候爲御尋以御使二種拜受仕誠以忝仕合奉存候右御請以使者申上候

十二月四日

右脇坂のは杉原半切

向寒之節御座候得共益御機嫌能被成御座珍重之御儀奉存候然は時候爲御尋御内々御覺書通拜受仕誠以難有仕合奉存候右御禮以使者申上候間可然樣御執成賴入候

土井大炊頭使者
安井武兵衞

右土井のは越前半切

一此方よりは何と申遣候ても夫は内々事故表向へ之禮はいつも如此品を不曰何故拜受といふも不言事也

以書付奉申上候一昨十二日大澤彌三郎へ罷越對談仕候處俗物老練之人物更に眞の談話も不罷成尤受は至極よろしく北地の事申候ゑも驚きも不仕又張込も不仕長刀あしらひに御座候間答も事長く御座候へ共つまる所大意は此度の御願御勘定奉行へ相掛り居調中之由尤餘程篤く越前殿よりかけ候よし扨又御大望之事故中々右から左へと申す樣には容易に參り兼可申當年中抔の御評議には安心不仕よし扨又西城君御容體にて諸事埒明兼

候よし右三條は琮と申聞御座候間元より大望之儀故早くよろしく整候は第一遲くともよろしく整候は第二早く候ゑも少しく整候は第三遲き上に更に整ひ不申候ゑは差支候旨笑ひながら申述候へはいづれ相含居候との御挨拶に御座候此段入　御聽候以上

十二月十四日　臣　彪　拜上

追ゑ奉申上候内藤隼人正はいろ〳〵差合を申今以不罷越候愚察仕候に當時内藤の手にかゝり居候故少々づゝもにげ候氣味と存候一昨日も今日も惣御勘定又は御普請等いろ〳〵差合申來候間明十五日案内なしに可罷越候と被存候以上

惣三郎様　虎之介

傳五郎様

昨日夜通し着別紙之通御運有之候に付爲心得御廻し委細致承知候扨内藤等へ御城付より案内いたし候得は別紙兩通申來内藤は十五日前差支の由昨日まづ大澤へ計參申候兼ゑ察候通老練之役人中々すきま無之乍併むつくりいたし候人物故談話は隨分相成候へ共めつたの事申候はゝ御直に御老中へ御さし込有之候半と專ら用心の樣子いろ〳〵問答もいたし候へ共別ゑ用に立候事無之たゞ此度御願は當時御勘定奉行へ御懸に相成居尤餘程篤く御懸に相成居候と申事又は御大望之事故我々鑑定にては中々當年中御分りには相成間敷と申事又此節　公邊も御多用殊に　西丸樣御容體にて諸事取込み居候と申事此三ヶ條位に御座候

一内藤へはいつれ十五日十六日抔に參り可申扨水野兩家内藤大澤と相廻り候へは野生御用はまづ相濟且前書之通り當年中は六ヶ敷有之御模樣にては野生永逗留も公私とも不益に御座候間御達之通三十日程にて罷下り申度乍併あまり極晩に相成候ゑは差支候間外に御用も無之候はゞ廿四日迄に發足仕度併御國へ伺なしに引拂候も如何敷候間何卒御評議之上明日御使には無御失念御運十九日御便にいよ〳〵爰許の御暇相濟候樣致度私

用半分ながら何分宜敷御扱に致度仍ゐ別紙御返却外に兩通相添御答旁草々以上

十二月十三日

尚々昨日新家氏より一書……私用故略す

以書附啓上仕候嚴寒之節愈御安全被成御座珍重御儀奉存候然は御内願御一條に付越前殿御初へ御贈品之義爰許限にて御決に相成夫々取計候處入御聽候由頭取共書狀にて承知仕り安堵仕候扨去る十二日大澤彌三郎へ罷越對談仕候處中々容易には御模樣をも不申老練之人物にていづれ受込候計之儀樣子に御座候内藤へは度々案内申込候へ共兎角差支多く御座候處漸々去る十五日罷越對談仕候是も老練且殊之外あいそうよろしく　上公兼々の思召委細に申述候處一々受よろしく申さば十の六七は世事は世事に相見え申候乍併何ほと世事にもいたせ更に御不尤と奉存候はゞ顔色等にてもあらはれ可申筈之處全く世事と計は不被存候同役共へも厚く申合其上越前殿へ相伺可申其上之義は我々力に不及との事に御座候同役明樂は老病にて引込居候よし近頃被仰付候梶野土佐守有之候故右之通り同役々々と申聞候事に御座候仍ゐ平七殿等へ御相談申上候處内藤へのみ被下物有之候ゐは當人も差支可申乍去明樂は兼ゐ御賴の人故明樂を除き梶野へ被遣候も如何敷候故やはり三人へ被下別段に内藤へ被遣候方可然との御評議に相成昨十八日に御城付を以夫々被下に罷成申最早私共御役目は相濟候心得に御座候間萬縷近々拜面可申上委細之義は却て行違に可相成哉と文略仕候以上

十二月十九日　虎之介

甚五左衞門樣
銀次郎樣

此度此まゝ五六ヶ年も在邑にて文武の世話いたし候樣被仰出候に付簾

中をも下し申渡委細江水家老共へも申聞虎之介へも申含猶又江戸家老等へも封書幷願書の案文等迄認七月廿一日認る遣し申候虎之介は二十日に此地發足也只今計の事に無之鶴千代麻呂代に相成候ても例にいたし度故　公邊御役人へ口上に申候義と又願書に認候義は後の障り不相成様申候様たとへは土地改御守殿抔はいつも有之事にはなく候故口上にて尙申させ願書案文へははふき申候事

以書付啓上仕候打續き朦々敷天氣には御座候へ共格別の風雨も無御座候様子にて尙明日も穩に可有御座奏存候然は　御簾中様御下向御内談之義第一市ケ谷赤坂御例如何と極密大關元次郎へ相懸田中理兵衞等内聞爲仕候處御兩家様とも御例無御座候尤納州濟溪院様南龍院様御子様に御座候明暦年中伏見家より御縁組御在國中御婚姻被爲濟翌々年御夫婦様共御參府之振は御座候へ共是は御部屋住之御義御例とは難申且明暦と申候ゟは御年暦古過候間かた〳〵御例には申立兼候へ共心得居候へは少しは心強く候氣味も御座候間近々西丸下へ罷越御逢有之候はゝ兎も角も御内談取扱候積に御座候

一長々御留守之上御簾中様迄御下向にては差支候段小川幷御抱傅等は頻ゟ申聞候へ共花ノ井抔は恐なから御情合をも御察し申上敢ゟこはみも不仕様子且又爰許政府御評議もまづ一決仕りいつれ　公邊御内談取計候迄には相成申候私儀も昨日より押ゟ出勤仕候處今日は御忌日昨日は式日いつれも明後日乘出し候積に御座候此段申上候以上

七月二十九日　　虎之介

甚五左衞門様

去る二十四日御便にゟ御親書御下け罷成謹ゟ拜見見候　御簾中様御下向一件爰許有司評議六ケ敷可有御座旨御遠察被遊候通りに御座候大意は先便銀次郎迄相運候間是より入　高聽候義と奉存候愚臣義も昨二十八日より押ゟ出勤仕り所左衞門等へも委細申合候處爰許政府之評議はまづ片付

公邊御願さへ被下濟候はゝ　尊慮ゑ通り御下向に取計候外有之間敷振に相決し申候御抱傳幷小川等は頻ゐ小石川へ御移りゑ說を唱候へ共是はよきほとに仕置　公邊御內談相分り候處にゐ理解申含候方と奉存候

一尾紀樣御例有無不相分延引仕候處御兩家樣共御例無之段相分り候間一兩日ゑ內惣御老中をまづ相廻り尤其日は對面は不仕水野眞田公用人共へ此度御直書代り御使に罷出候間近々御手すきの節御逢相願候旨委細相賴可申奉存候手紙にて申入候位にて直に逢を申込候はゝ此節ゑ勢は多分斷に可相成模樣に御座候間右ゑ通りまづ公用人ともへ逢候ゐ直に申入さしたる御用向に無之と越前守等安心仕候はゞ對面可相成奉存候御旗本ゑ族對客不罷越先達ゐ達候處諸家ゑ家來內意を聞候義も以來は致遠慮候樣是又達に罷成此節は御老中方門前至ゐ寂寥ゑ由に御座候

一濱松城主去る十三日所かへ止候翌日に御座候不快にゐ引込候處其日晝過押ゐ登　城夫より引續き精勤に御座候大炊頭此間中引込是は最早出勤有之間敷旨巷說に御座候取留候義勿論無御座候

一濱松松代へ對話ゑ節御加封云々位には可申述委細御下知ゑ趣奉畏候

一御碑文九枚爲御登に相成云々御下知ゑ趣奉畏候もし不用に罷成候はゝ御連枝樣方へ被進候義是又奉畏候諸方へ對談仕候にも乍恐手持に罷成於愚臣難有奉存候

右件々乍恐御請旁申上候以上

七月二十九日

以書付申上候御老中方へ御使ゑ義先便申上候通り二日に可相勤奉存候處眞田殿不快ゑ由相成候はゝ眞田殿へ一寸拜謁ゑ上水野殿へ罷出候方便利よろしく御座候間一日見合候處中々一兩日にて出勤相成兼候よし承候間昨三日まづ惣御老中へ一と通り御使相勤申候ゐ公用人へ對談仕り水野殿へ近々參上ゑ義申入候處いづれ近く沙汰御座候筈に御座候間沙汰次第又々罷越及御內談候積に御座候如何ゑ模樣に可有御座哉扨々心配仕候眞田

殿不快々様子委しく相尋候處廿七八日より疝氣にて可有之哉不快朔日押ゟ出勤相障候由全くの不快に愚案仕候當月の眞田殿初月番々處右故堀田殿に相成申候木綿十端つゝへ浮龜相添被遣に相成候處四家とも餘程くびをひねり候樣子故御一統へ同樣御贈被申旨一々に斷り候處夫にて漸く公用人共安心々樣子夫にてさへ眞田殿抔にては半時計も相待申候音信贈物等も此節殊々外やかましき事と相見え眞田公用人抔は皆さいみ袴に御座候今日外に申上程々義も無之いづれ御内談々上可申上候以上

八月四日

尙々羽倉外記其外御旗本等五六輩對談仕候處　公邊の御模樣御國にて推察仕候通にて更に相分り不申此度は御用もれを嚴しく制候よしに御座候間誰も相分り不申樣子に御座候皆推量々說に御座候尤推量々說は御國より推量と同案に御座候たゞ水野太田兩侯々家來さへ一切通路無之抔は甚しき事に御座候當月眞田殿初月水野殿師匠番前々は一月九百兩もかゝり候よし眞田も舊弊とは申乍やめては吝嗇の樣相成候故此度は如先例取計此頃新役を取られ候節改め可申とやはり九百兩のすわりにいた置候處去月廿九日に至り水野殿より改革の說を發し嚴重に改り候よし每日公用人四五人もつめ四五兩々馳走に相成候を此度は一日壹分貳朱にて相濟候樣相成候よし其外舊弊改革追々御行屆々よしに御座候以上

甚五左衞門樣　虎之介

銀次郎樣　拜上

乍恐以書附奉申上候去る七日越前殿へ罷越對談々模樣大圖今日年寄共迄相運び候間入　御聽候義と奉存候委細々模樣は中々書取行屆兼候得共越前守是迄は餘程　上公を乍恐向ふに仕り內心には定ゟ自分の儀を何と歟水府公より御申立に相成候半と存候位の顏色に相見え太田備後守退役にて安堵仕り　上公長く御在國にて安堵は仕候得共又眞田と御合併可被遊哉と心配仕候に相違無之鑑定仕候年寄共迄相運候文面にて右々勢御推察

可被遊候へ共直に其口氣承候へは明白に御座候扨世間にて何と申候共越前守の外には御改正ゝ元を取候人物有之間敷との御意兼々奉承知居候義ゆえ右御意を相含み問答仕候故越前守も疑相晴顔色と罷成後には少々悅氣の容子も相見え兼々氣惡敷人物とは奉存候へ共かく迄には有御座間敷と奉存候處實に好雄とも可申奉存候愚臣義も是迄四五度對話も仕候へ共此度の如く味惡く引からまれ候義は不相覺誠に苦心仕候

君夫人御下向ゝ一條十の九は御六ケ敷模樣に御座候へ共右ゝ通りの人物に御座候間何と振合をかへ一と働き仕候も難計何れとも愚察仕兼候御模樣相分り次第早速奉申上候此段奉入　御聽候以上

八月九日　臣　彪　上

以書附啓上仕候一昨七日西丸下へ罷出候付大圖書取差上申候兼々六ケ敷御人とは存居候所扨々心配仕候委細別紙ゝ通り御六ケ敷釣合に御座候へ共又引受候へば被相働候人故如何樣に評議被致候歟其所は難計いつれ又々呼出しを相待居候計に御座候御序ゝ節　高聽にも御入被下候はゝ大幸奉存候此だん申上候以上

八月九日

尙々眞田よりも近日ゝ内朝五ッ時罷出候樣昨夜沙汰御座候水野殿も安心指圖有之候上右ゝ通申來候事と相見申候別紙ゝ意味も御座候間眞田殿へはまづ此方より不申述眞田殿口氣により臨機應變ゝ積に御座候閣老もやはり人情は同じ事と相見え無益なる所へ嫌疑有之候ものと嘆息仕候以上

甚五左衞門樣　藤田虎之介
銀次郎樣

去る三日越前殿始へ御使相勤其日は御逢日限ゝ義公用人へ申談罷歸候處來る七日朝五ッ時罷出候樣申來候付昨七日未明出宅六半時西丸下へ罷出候御逢日ゝ由にて例ゝ通り座敷向混雜いたし候へ共御旗本へ一と通り對客相濟候上出會被致候處一體の顔色口氣是迄の越前殿には無之誠にはげ

しき事にて野生義も甚心配仕候問答大圖左之通りに御座候

御口上一通り演述越前殿も　上の御容體被相伺頂戴もの御禮被申上畢ゟ

此度罷出候義外之次第にも無御座先以先般は數ヶ年在邑文武等之世話被致候樣格別之御譯を以被　仰出木戸殿は勿論家中一統誠に難有仕合奉存候右樣出格之御沙汰御座候處彼是申上候義如何に候へ共紀州殿尾張殿始め惣ゟ國主等隔年に交代被致候向は參府年よりも歸國年之方勝手向爲にも相成國元に居延に相成候へば夫丈別ゟ補と相成候歟に承知仕候處木戸殿の儀は定府同樣御膝元にのみ罷在國元之義は家中手當其外手詰に相成居候歸國と申候へは存外入費も相懸り一代漸く一度位歸國被致先代抔には一度さへ歸國も相成不申仕合當代にては國元之義篤く世話被有之候故別段仕法金等を以兩度迄歸國も被致候へ共數ヶ年在邑と相成候ゟは入用手當も無之且別段仕法金を以在邑被致候樣にては相當不致候間江戸水戸勝手向ゆり合せ其外殊之外切詰既に私共抔も江戸より供にて罷越在邑中勤番之姿に候へ共夫等も不殘國勝手被申付候類に御座候處第一水戸殿の簾中引離れ被居候ゟは奥向臺所向等莫大之失費に有之殊に長々在邑之義國元にゟは一統難有奉存候へ共簾中附之者は力を落し相嘆き候樣子に有之いかさま簾中にも三十七歳より四十五歳迄引離れ候義太平の人情にては忍ひ兼候場合臣下の身に取嘆敷奉存候に付旁役人共一統申合候處何卒簾中にも下向被致候樣相成候得は右勝手向幷情合共都合宜敷御座候間其段水戸殿へ申立候處被任其意乍併表向家老共を以被相願候も如何敷に付先づ私を以御内談申上候と申しも畢らぬ内

御簾中下向之義は所詮出來ぬ事と二三遍いら〳〵しく被申候へ共元より御六ヶ敷義とは奉存候故まづ御内談も申上候義既に此度尾紀兩家前例をも相糺候所紀伊殿二代目清溪院殿在國中伏見家より婚姻相整兩三年過參府之類例は相見候へ共的例は無之尤此度の如く五六ヶ在國之之義

被仰出候例も無御座畢竟格別ゑ御譯を以被仰出候御儀に御座候得は外諸侯方と違ひ簾中下向ゑ義も又格別ゑ御譯を以爲御濟にも罷成候へは別ゐ當家規模にも相成難有奉存候ゐ可有御座旨申述候へは

外の儀と違ひ何んぼ御家柄でもならぬ事はならんもの内室を國へと云事は諸侯一統出來ぬ御定なれは差見へ御六ケ敷事であらうがいつれ御家柄の事一存の御挨拶も申兼るから同列へ申合御聽にも入た上で何と歟御請申上やうとの申聞其口氣いつれにもはげしく是迄四五度對談仕候へ共右樣のいら〳〵しきつり合は初ゐに有之惡しくいたし候はゝあまり御我儘ゑ義と申事にとれ法律のみにて評議の程も難計に付前にも申上候通り表向家老共よりさし付被相願候品に無御座候故まづ私を以御内談被申上候義に有之候所直樣御同列樣方へ御評議御聽にも御入に相成候ては甚心配仕候間相成候はゞ御一存ゑ御了簡相伺所詮被申立候迄も有之間敷と歟もし又此道にも被致候方と申す御程合も御座候へは早速國元へ申越其上にて又々相伺候振も可有御座旨

隨分あやまり候ゐねたれ申候所

信濃守は毎度御屋形御懇命を蒙るそうだなと被申聞候故「いかさま五六ケ年以前より御出入被成私覺候ゐ兩三度も屋形へ御出被成候旨相答」此度はどうか同列一統へ廻勤被致たそうだが信濃別ゐ御懇意も申上るなら信濃へ御頼みになつたらよろしかろう

是は木綿十反つゝ四家へ御使相勤尚又越前殿へ御逢ゑ義申込候處越前殿よりは七日に罷出候やう兵馬より申來候へ共信濃殿は公用人不快のよしにゐ追ゐ沙汰可有之旨運阿彌へ申來候定ゐ信濃殿よりも水野殿へ相談有之たること相見候

御指圖ゑ趣は畏り候へ共此度私共出府ゑ義數ケ年在邑ゑ義被仰出候付ゐは別ゐ忝次第被奉存仍ゐ御同列樣方御一統へ使相勤篤く御挨拶被申述候樣被申付候へ共御簾中下向ゑ一條は此方樣へ計御内談申上候樣被申付尤

松代侯へも御役成後一度も書面等不被遣あまり御無沙汰打過候故出府仕候はゞ御逢相願御役成之御悦ひ尚又あまり御無沙汰打過候段よろしく申述候様被申付候眞田様へも内實は御簾中様御一條も申述可申奉存候處最早本文之通り申述候上は眞田殿へは更不申述方可然存候尤眞田殿の方よりさけ候ゟ出候はゝ格別に候へ共當時は初月番にて公用人賴人水野殿より つめ居何事も水野殿へひゝき候間眞田殿もまづはつし候半被案候　間御左右次第

松代侯へも罷出可申候へ共簾中一條水戸殿より申付無之儀を御賴み申上候義は仕り兼候乍併御指圖も御座候上は早速國元へ申遣中納言殿存意も無之候はゞ其上にて松代侯へも御内談可申哉と申述候へば

越前殿顏色少々和ぎいや御國へ被伺候上別に御賴にも及ぶまい同列は一體の事なれば拙者へ計御賴みでも差支はござらぬが一體數年御在邑之義備中守扱之事故實は備中へ御賴み之方便利がよろしいが夫以譯ゟ御賴みにも及ぶまいからいつれ御内談之振を以申合是より沙汰申さうとの事故

何分宜奉願候旨申述其内御歸國に付ゟは如何様之廉にて御入用過候哉と尋有之候へ共夫々可然挨拶罷歸り可申と存候處

此度御在邑之義實に格別之儀を以被　仰出乍憚御本意之御義故御國政は勿論萬事格別に御世話被爲可然外諸侯と違ひ御歸國中御入用過候段は尤に候へ共夫には御役人の御自分抔も又了簡も可有之右等はいかやうにも出來になりさうな事抔と厚く被申含座を被立候付退出

以別紙奉申上候愚臣登り前御意相伺候に新見伊賀守へ御上書御差出し可被遊との御事に被爲在候へ共越前守如何にも疑深く御座候間新見等へは容易に御使相勤兼候様奉存候太田備後守退役之義は其ケ條數多中にも議言も御座候ょし御座候得共水野美濃守を救ひ候故黨し候と申ケ條第一と承り申候伊賀守は越前間柄に御座候間伊賀守へ罷出候はゝ越前守へ直に相分り候間御建議の御義は御上書に無之やはり御ケ條書にて越前守へ御廻し被遊入臺聽候様被仰遣候方可然哉と奉存候いつれ太田備後守より御内意申上候一件おかしくわだかまり居候様奉存候此度愚臣越前へ對話之義　君夫人

御下向之義は姑くさし置第一越前守疑をはらし候には大に幸の樣奉存候先日羽倉外記方罷越いろ〳〵　公邊之風聞承候處外記申聞候は私儀越前守懇命を受居候間容易に噂申兼候へ共水戸樣長々御國は越前守敬して遠け奉り候哉と愚察尙又備後守退隱抔も甚殘念之筋御座候水戸樣には定而濱松を御惡み被遊此上同人御しりぞけの義御建議可被爲在哉と奉恐察候へ共何を申も濱松抔の人材當時は無之同人はあらごなしは得手に御座候間兩三年之所は存分爲働其上にて大害を振候はゞたとひ水戸樣御建議無御座候迚も有志之者一同建白も可仕何卒今之內は助け置申度乍併水戸樣は御承知被爲在まいと私壹人には無之有志之もの一同心配仕候旨極密に申聞右同志と申は川路三左岡本忠次江川太郎の類と存候仍而愚臣相答候は一家の政事と違ひ　公邊へ拘り候儀水戸殿にも代々手元調之義にて臣下へは一切申聞も無御座候間如何樣建議被致候哉有無共相分り不申候へ共乍併愚察いたし候に世間にてはたとひ惡口等有之候共越前守外に御改正之元を取候才有之間敷旨は水戸殿にも度々噂被致候をば無相違承知候間貴兄抔御心配之樣なる事は建議被致間敷存候旨相答申候其節は左程とも不奉存候處其後越前守へ對談仕候へば外記の申候樣なる說もやはり何となく越前守腹中に入居候義と奉存候右旁之事情いつれ歸着之上可申上奉存候御口上書之義追て御心に不爲滿候樣にては不宜尙又御いそぎ被遊候而御いそぎ被遊ぬ御事と奉存候間得と御ねり被遊候方と奉存候　公邊御改正も此度は三日法度には無之殊に寬政は御幼君にて樂翁一人の力に御座候處此度は　上樣御盛んに被爲入候故歟寬政よりはよほどよろしく可有御座奉存候此度被仰出萬石以上御役人供連等之達抔中々感服仕候御普請方其外諸向之御取締巨萬之由是は左樣可有御座筈と奉存候人才も大ていは擧り愚臣懇意仕候文武執心の御家人抔も追々拔擢に罷成申候當四月中三年無改父之道云々のケ條抔大內記へ御聽に罷成候處大內記は御改め無之方と申上又成島邦之允奧儒御者なり御聽に罷成候へば是は　有德院樣

御例を引申上大内記ゝ説甚御不滿に被思召候よし大内記は夫が元に罷成候ゟ死去仕候よし世間にて取沙汰仕候へ共是は元より老病にて相果候義に御座候川路三左衞門抔も一人立御前へ罷出候處實に　上様御英明には奉感服候由難有御事に奉存候追々承候へは弘道館も誠に御益ゝよし何卒此上ます〳〵御世話相屆　公邊の御改正をあをり付候様仕度奉存候へ共公邊御役人程にはかく申上候愚臣抔も張込足不申奉恐入候儀に御座候前後混雜御分り被遊兼候半奉存候へ共大略奉入　御聽候以上

臣　彪

八月九日

去る九日御便にゟ御親書御下け被遊謹ゟ拜見仕候　君夫人御下向ゝ義幷精宮様ゝ義御申立遲速ゝ義等委細御下知ゝ趣奉畏候然る處九日御便に申上候通ゝ事情に御座候間此節は日々越前守より呼出しを相待候のみに御座候信濃守へは逢候ゟも此方より申出候事不相成候へ共一旦申込候上はいつれ罷越し候はゞ少しは事情も相分り可申十二十三兩日ゝ内罷越度申込候へば十一日より又々不快にて引込候由公用人より斷り御座候眞病歟否難計候へ共いづれあまり引込過候様奉存候

一尾州様御村かへ川越增封此方様のみ御後れ云々ゝ趣奉畏候所右は北地ゝ事のみ專らに被仰立一向御いそぎ不被遊振去年中も被仰遣候御儀故乍何何とも申上兼候様奉存候しかし越前守より御さそひ申上候を吹拂に仕候は不相濟候間此度を幸に北地とも何共不被遊只模様御聞被遊候ては如何可有御座哉

一此御砌御自分事のみ被遊候も如何と奉存候間兼て相伺候山陵等を初御ケ條にて可被仰遣哉

彪物語　下

一此地へ罷登り御旗本等の説を承候處何れ御取〻向等の義は存意申出候人夥敷由に御座候間可成丈け大まいの義にゟ誰か拜見仕候ても水戸樣ゟ御論と奉感服候御儀に仕度候たとひ此節御用無之候とも有志ゟ者乍恐御たのみに奉存候御儀に御座候間近小の儀をはまつ御控被遊候方と奉存候いつれ御上書の義は御賢慮被爲在候樣仕度第一は越前守内心には　上公に御うたれ可申哉と迄疑ひ居候處に御座候間御本文に越前安堵大慶仕候樣御認被遊候はゞ少しは事情をも申上へく奉存候日々空敷相待居候もあまり無術に御座候　思召も不被爲在候はゞ別段御飛脚にてなり共御一封越前へ被遣候樣仕度尤御一封はやはり例の通り運阿彌持參の方可然奉存候右を拜見ゟ上愚臣を呼候位に御座候はゞ格別よろしく可有御座奉存候

萬事御推察可被爲在此段大略奉申上候以上

八月十四日　　臣　彪

三度御封書奉拜見候今日越前守へ罷越委細甚左衞門等相運候通り御内談相整不申故愚臣恐入奉存候此上之義は敗軍之將にゐは成功無御座候間もし　思召も被爲存候はゞ乍恐誰ぞへ被仰付候樣仕度奉存候愚臣内談に而整不申外人内談相整候迚一點猜忌の念無御座却ゐ難有仕合奉存候

一彪への御書拜見可爲仕旨奉畏候又今日御書にゐは土井等の御惡口被爲在候故愚臣憚り可申と御察被遊候へ共矢張云々取扱可申旨委細高諭之趣逐一奉畏候　高察之通り愚臣も如何敷奉存尤御意故今日も懷中は仕り罷越候へ共第一今日は先日と打ゐ變り悉く疑晴候樣子に相見右御書指出候釣合も御座候間拜見不爲仕候夫共拜見爲仕候方御爲宜きと存込候へは釣合にも頓着不仕差出候へ共少々愚慮も御座候故先つは差出不申方と心に相含罷在候間いよ〳〵差出不申方に罷成候義に御座候愚意には御書の趣頻りに越前を御ほめ被遊候御文面に被爲在候へ共第一越州の外改正の任に當り候人無之と被思召候は御實意故感動可候土大南子を牛の如くと被遊候義如何さま右樣の人とは相見候へ共右樣御惡口被遊候位にては風一つにゐ我等をも如此御惡口可被遊と存候は差見候殊には何程御間柄(本〳〵し)御嫌迄も事に寄候ものに御座候乍恐御德義にも拘り可申奉存候付拜見不爲仕候折角御沙汰被爲在候へ共此段存分奉申上候且又御書を懷中罷在候譯も無之旁差支不少御座候

一越前のみ御賴被思召候御意味は隨分先日も申述尙今日は西尾侯卒去後は此方御一人のみ云々と申儀篤く申述候義も御座候

一越州へ御書御認被遣候由難有御事奉存候此節の模樣　上樣ます〳〵御張込昨十八日は於吹上三奉行公事裁斷俄に御聽聞被遊候位其外去る十五

日大久保加賀守の御稱石川惣三郎より申上候儀と奉存候間不呈覽候誠に落涙仕候何卒右等を以世子をも御勵し被遊且又加賀守へも何ぞ甚五左衞門扱にゟ成共聊の御武器にても被遣篤く御口上被仰遣候はゝ一統難有可奉存哉と奉存候右御釣合に御座候間必御上書ゟ内御取用罷成候半奉存候當時　公邊御役人の顏色誠に必至ゟ樣子扨々感服仕候

一越前守へ御贈物ゟ義甚五左衞門等へ申遣候尙更　御賢慮奉願候御無益の樣に罷成恐入候へ共無用の用に仕度奉存候其外新見矢部川路等何れも無用の用に仕度追々對話ゟ模樣歸府ゟ上可申上晩景に罷成候間大略奉申上候以上

八月十九日　　臣　彪　上

追ゟ奉申上候　君夫人御下向ゟ義御整に不罷成於臣別ゟ奉恐入候右臣の口より申上候は如何敷候得共實は御整に不相成方天下への御聞え尙又御屋敷普請等はよろしくと奉存候右に付愚存甚五左衞門等迄申遣候間定ゟ申上候半奉存候爰許交代御止の義抑も水戸に居候ゟ了簡仕候と實地の了簡にては大に相違仕候　公邊にゟは二百年の今に至迄諸侯國中へ家内同道を禁じ既に此度の如く無據御筋にさへ動き不申夫に付ゟもせめて交代御押通しに仕度奉存候此方の樣子委細歸府可申上候へ共實に目もあてられ不申恐入候事に御座候

追ゟ奉申上候今日着の越前へ御書愚臣今朝呼出に付ゟは如何仕候もの歟と一寸疑惑仕候處第一に御大政の　御主意且其外の義御國より被遣候御儀故今朝の挨拶に不拘被遣候方可然奉存候間定ゟ今夕運阿彌持參仕候事と奉存候折惡敷御祥忌月は鮭は如何と奉存候處御日柄に御國は出候には無之明日　公邊御日柄に付やはり今日差出可申奉存候扨右御書ゟ末に愚臣登り居候間云々の御文面も御座候間何れ愚臣儀も相待居候外有御座間敷乍去越前守方にゟは今程愚臣への挨拶入　御聽候故夫に

ゐ御分り可被遊と存候全く御大政御主意の一條のみ故御返書延引も難計仍ゐは七八日控へ居沙汰無之候はゞ愚臣義又々罷越近々歸鄉仕候處御用無御座候哉の段催促半分可申入候ゐは如何可有御座哉御下知奉待候以上

八月十九日　臣彪上

十四日貴翰拜見仕候秋冷之節愈御安泰被爲入奉敬賀候扨は駒込第一條に付七日對談の模樣申上候處御欲目故歟御整に相成候半と被思召尤御六ケ敷候はゞ臨機應變の義委細承知仕此間御沙汰を待居候處今日呼出し御調に不相成候委細別紙之通に御座候扨々不行屆奉恐入候別紙の通り此方御事情をも隨分御察申上候ての挨拶故扨々當惑仕候既に別紙へは認落候へ共雜談中に諸侯の家法により候ゐは五年も十年も家中獨身在藩も有之由誠に難儀なる事なれども是畢竟上の御法嚴重に相立居候故乍難儀も人々覺悟致候事と相見候抑閨門之情をも被含笑ひなから被申述候位故別ゐ困り申候扨如何樣の　思召に相成候歟は難計殊に私事不働にゐ今更申上候は恐入候得共此度の御一條御情合におゐては幾重にも御成就に仕度武田等申合問答振をも必至と考候事に候へ共實は天下の公論より見候はゞ此度の御義御整候はゞ　君公の御事には被爲在間敷當時他所にゐも誰申觸し候哉水戸樣長々御願之上御在國に付ゐは國主も追々御まねをいたし長々在邑を望み可申抑と申又は御簾中樣迄御下りを御願被成候抑と申觸候由追々承知仕候右等事情も御座候上は御簾中樣御心事は奉恐察候へ共幾應にも御慰め被差置御國政御專一に御世話被遊候外有御座間敷哉乍併來年より六ケ年と申候へば乍恐あまり御簾中樣御情をも御かへりみ不被遊候樣にゐ如何敷殊には爰許の通論に候へ共世子御十六歲迄御乘出し無之と申も不得體又六ケ年御世話被爲在候迚も是にて御よろしきと申は無御座却ゐ御長く相成候へば夫丈御國人氣もゆるみ申候間來寅年より辰巳の頃迄精々御世話被爲在大圖經界學校等御目當相立候所にゐ譬へは去る丑年其儘五六年云々被仰出候處最早土地改正も相濟學校規模

も相立此上世話と申ては際限も無之候處今以　文恭院樣御佛參も
不被致御守殿樣云々に付一と先つ參府（思召次第直樣御歸國も可然哉）被致度云々と申
氣味に被遊候ゟは
如何可有御座哉御情合にゟ論候へば　君夫人御下向第一に候へ共出來不
申事は致方も無之且又　君夫人御下向の御入用有之候はゞ　君公には必
御參府御歸國も御間に御合可申奉存候兎も角御國政御專一又御二方樣御
情合にも叶ひ又　公邊御首尾も御よろしく仕度至願に御座候此度の御一
條御整にさへ罷成候へば土貢無御座候へ共別紙の意味故此段存分愚存申
上候以上

八月十九日　虎之介

甚五左衞門樣
銀次郎樣

以別紙申上候先便御書中木綿五反越前殿へ別段に被進候義御沙汰も被爲
在候へ共實地にて了簡可仕旨承知仕候右は此方にても彼是申合候へ共
公邊御時節柄實に程合不相分萬一別段もの等被遣候んと申挨拶にゟも有
之候ゟは御外見も不宜乍併御承知も被遊候通り味も御座候儀故何ぞ被遣
度御座候へ共爰許にゟ御仕込ゝ品には御相當の品無之貴地にも例ゝ通御
國產乏敷仍ゟは鏃矢の羽（御有合御座候樣相覺申候）二ゝ樣へ槍の穗石突共二十筋歟三十
筋も御添被遣候ゟは如何と存候へ共助共父子卜傳の孫幷幸左衞門幷則休
ゝ孫へ被仰付何程急ぎ候迚來月中旬には可相成仍ゟは少々山師の樣には
候へ共運阿彌へ相達兵馬方え瀨ふみ爲致候はゞ只今不被遣候迚も響き合
よろしく候半と差懸り候儀故決斷仕候昨十八日運阿彌へ相達左の振に爲
懸合申候

此度虎之介爲登候付ゟは爰許樣御義は用向御賴殊に兼々御懇意旁別
段被遣もの被致度候へ共却ゟ遠慮被致候四家御一體に聊の產物被懸
御目候扨來春參府ゝ節此方樣へは土產の印迄に少々心懸候品有之近

々出來候へ共參府延引に相成候上は餘り御無沙汰に相成候間幸手當の品出來次第御送り被申度候へ共此節諸家より御内談事等一切御斷りの御砌何程御懇意の御中にても御差支可有之哉尤聊の品にゐ前廣御問合申候程の品には無之候へ共云々の例の辨才にゐ兵馬へ爲承候處右は御尤千萬いかさま此御砌越前守にもいろ〳〵心配仕候間御問合の趣大慶可被致何れ申聞候上是より御挨拶可申との事にゐいまた挨拶無御座候

但御品と申ゐも如何樣の御品に可有御座哉心得に伺度旨運阿彌へ兵馬申聞候に付不得已委細には心得不申候へ共何れ矢の羽槍の穗類武ばり候品薄々承知仕候旨挨拶罷歸候由

扨別紙之通りにゐは前文の儀も誠に御無益と相成候得共いつも御用有之時のみさしかへり御贈物候姿に相成居候も不得體且只今にゐは乘た船と申勢に御座候間前書品々來月九日迄にも出來御内々被遣相成候樣仕度於私奉願候御無益に相成候段は奉恐入候右貴答旁申上候

八月十九日

尙々迚も被遣候ならば槍穗等念入に仕度奉存候黃金より見候へば何御品にゐも下直と存候以上

以別紙奉申上候羽倉外記申聞候は御家にゐ御軍船御新造に相成候由如何樣の御製作に候哉と尋に付右は新造には無之源義公殿代海防を兼候荷船有之候へ共手入不行屆致中絶候間致再起度尤此節　公邊内談中にゐ未分り不申候旨相答候處夫にゐ分り申候先達ゐ私より（外記）伺出には房總海防を持候に付ゐ丈夫の船御手當に仕度既に鍋島肥前守儀は無伺バッテイラ（傳馬船）異國の通りに出來成就いたし水戸殿にゐも大船御造立の由水戸殿の義は格別に候へ共（付記）本文は外記私へ咄放少し意味有之も難計水戸殿の義は肥前と共公邊にて御製造無之御義に候はゞ水戸殿とても如何に申立候は安心不仕候

肥前守勝手に出來候位に候はゞ御代官の願は御濟しに致度萬一御六ケ敷

候はゞ肥前守へ御察當有之度旨申立候得共今以不相分候との物語に御座候此段御心得に奉申上候以上

八月廿三日　彪　拜上

又奉申上候此地にて追々有志之者へ出會仕候序何となく天下大船の事せんさく仕候　公邊にて松前御持被遊候節御出來に相成候龍翔丸と申候船は廣大にして柱も二本銃窓も付居候樣に御座候圖面は手に入候上可入高覽奉存候右御船當時如何樣罷成候哉いまたせんさく行屆不申候以上

去る廿二日宿次にゐ御出仕の御狀同廿四日夜深更拜見仕候君夫人御一條公邊の方一應御六ケ敷御模樣にても夫のみにゐ御捨被遊候へは手を盡し候と申には無之候間御國より云々の趣を以今一應御内談取計候樣夫に付御ケ條御筆爲御登に相成委細奉畏候尙又花ノ井より同人妹へ文通の義尤是も書取方等委細御工夫の趣具に被仰下承知仕候早速爰許御同列樣方等御相談申候處再應御内談之義は早速取計可然花ノ井文通の義は　公邊にては此節御改政中別ゐ内證訴訟がましき儀は嚴重御取締被爲在御側と奥の方は悉く〆り合居候砌右樣の義何程花ノ井壹人の歎息の振に認候ゐも萬一推察有之候へは如何敷候のみならず御承知之通り花ノ井と申人物一向機密の事は談し兼候既に君夫人御下向の事も花ノ井より小川へ内話にゐ段々沙汰廣く相成取扱にも甚さしつかへ申候事にゐ旁相決し兼候付まづ再御内談の方のみ取計可申と一決廿五日兵馬へ運阿彌より案内爲致翌廿六日早朝西丸下へ罷出申候扨口上にては委細最初御内談の節申述候事にゐ此度別に申述候文句無之尤口上にゐは何程委細に申候ゐも段々立きえに相成候間最初の内談も越州殿御城にゐ評議の節は何歟側用人が參りごた〳〵申聞候が大意はケ樣位に被咄候は差見候間此度は口上覺に認候方可然やはり最初の同じ意味を認持參仕候御下知御ケ條の内御三家樣誓紙御差上無之條は相認申候其外は口上なれはよろしく候へ共　思召を以被仰出に致度抑申事は面書には相認兼且又瑞龍御拜の事抑も御尤には御

座候へ共是は此前罷出候節の問答の意味瑞龍の事は申し兼候釣合御座候故是又相認兼候間彼是斟酌の上可然相認持參仕候扨西丸へ罷出候處兵馬を以被申聞候は今日御出の義先日中御内談とは別事に可有之哉又やはり先日中の御手續き候哉且又書取にゐも致持參候哉との事に付去る十九日の御挨拶早速國元へ申遣候處尚又申來候振も有之候付同樣の義には候へ共又々罷出尤此度は口上覺書をも持參候振相答候處先日之儀に候はゝ越前守被懸御目候迚も外に御挨拶申候廉も無之且今朝は出仕前責馬に取懸り居候間右御口上覺御封し被成候ゐ私迄御差出に致度由に付段々兵馬へ談し合候處兵馬は表向はしらぬふりに候へ共内實は委細御事柄承知にゐ彼もいろ〳〵咄有之候故野生よりも存分相咄越前殿へ申述候よりも一段打明け無伏藏申聞尚又紀州御類例抔も此度は別に書付に致し參候を相渡し口上書は封候ゐ相渡候處早速越前守へ可申聞由にゐ暫隙取追ゐ兵馬罷出又々申聞には御口上書御封之儘差出越前守にも委細承知致候越前守義も御屋形樣御懇命を相蒙り居候義故力に及候義は何分御賴無御座候迚も御如才は不仕候へ共此度の御事柄は如何にも御六ヶ敷可有御座尤先日より御内談之議之趣御尤に御座候へ共物事此度に限り後の御例に不相成と申事もやはり後の御例に相成又御三家樣計と申儀も惡敷致候へは外樣方へ移り候樣なるもの故越前守儀も此度の御事には扨々當惑仕候との事に御座候間尚更よろしく御賴申候旨厚く申述相引申候

事情右之通に御座候此度は兵馬等へも銀子被下に取扱至極あいそうの宜敷御座候へ共右の樣子にゐ扨々安心不仕候

一昨日着御筆にゐ花ノ井より文通の義御下知被爲在候處右は本文の通り爰許御同列御存意有之相扣居候へ共御書之振も御座候間尚又今日御相談申候處所左衞門殿御賴合平七殿御用召等にゐ御混雜いまた御答無御座候此段早々申上候以上

八月廿八日認置

甚五左衞門様　藤田虎之介
銀次郎様

別紙申上候花ノ井より内文通の事御同列様御評議相分り兼候趣本文へ相認候處右はいよ〳〵見合候方可然旨思召御達御座候間先つ相扣へ申候扱右御一條正不正の論は姑さし置一體婦人女子の情すへて人の夫婦中睦き事は悦ひ不申別ゐ後宮は其情甚敷御座候間前文之義も却ゐ害に相成も難計旁不容易御座候此たん申上候以上

八月廿九日

致拜見候　君夫人御一條再應御内談の義委細承知年寄衆へ申上候御情合奉推察候へは實に無理にも御下向に仕度候へ共扱々存る樣不參痛心此事に御座候

一槍穂等御登早速御研等武田より御矢倉奉行へ達申候數本の事故十日も懸り可申由故節句迄出來候樣達申候鏃は何れにも不景氣なる御品に候間槍穂と羽計にゐ可然申合候扱越前守へ御贈物の義運阿彌より瀨ぶみ致候處別紙之通り被下物は夏の御小袖と申如くやはり此方の御役人御連枝樣より被下なれは御改正中にても安堵いたし頂戴仕候如く越州もよきかぶに被致候歟扱右樣被成候處へ穂と羽計も如何致候物歟去年迄も黄金二枚三枚も被遣候穂はよき品に候へ共素槍は御承知之通候間價を以論候へは左迄之御品とは相見不申瀨ぶみいたし候上被遣候程にも無之樣存候もし何そ思召之御品にゐ別段被遣にても可有之哉年寄衆へ御申上宜御評議に致尤其内に御一條惡しく相分り候へは引留可申候

一加賀殿へ羽二重可被遣旨難有御事に御座候今日大久保殿迄加州殿より直書被遣候右手跡にて計も感服他日の御老中に相違無之候右直書下り候上被遣候樣にゐも響き不宜候間御羽箱等手當いたし置朔日着次第運阿彌さし出し候積に御座候備州殿嫡子新六郎昨日參上の樣子是も殊によき人物に相見へ申候右に付ゐも儲君御英明彌增御別段に仕度ものに御座候

一今日永詰も御達に相成矢之介彦兵衛隨分悦氣鈴木小柳津大悦立花高久泣顔其外夫々おもはくがかはり申候無益の儀文略草々

八月廿九日　　虎之介

惣三郎様

兵介様

御簾中様御下向一件虎之介より別紙之通申來越前殿より未何等挨拶は無之候へ共先奉入高覽候此段も入　御内聽候樣頼入存候以上

五月朔　　戸田銀次郎

御側衆中

以手紙啓上仕候昨日は度々得尊顔大慶奉存候其後益御壯榮被成御座珍重御儀奉存候然は其節御贈物之義此節柄之義に付被差付被遣候も如何と先御内談の趣具に申聞候處右御贈物の儀は享保寛政度御館樣振合も可有之此方にゐは此節柄迚も御先□樣の儀被置下候はゝ頂戴仕心得の旨申聞候に付左樣思召可被下候右之趣申上度早々如此御座候以上

八月廿日　　物集女

山方様

御親書御下け被遊謹ゐ拜見仕候御冑之儀彦九郎心付の趣申上候處御大切之御武器右樣賄賂には御遣し不被遊との趣乍恐御尤之御儀奉存候早速彦九郎へ通達仕候處同人義別ゐ本意至極難有奉存候旨申聞候

一計策は軍中にゐも用候義に候へは花ノ井文通の義も御一策と被思召候へ共川向の御下知には御行屆不被遊候間實地へ御任せ被遊候旨恐入且は難有仕合奉存候愚臣義も右御一條にゐ登り居日夜夫のみ相考罷在候義故御整に相成候丈之義は如何にも盡力仕度候へ共有害にて無益儀は又恐入彼是心配仕候扨越前守一人のみ御頼みに仕り外へは更に手を出し不申處信濃守義は今以病中故瀬ぶみも不仕伊賀守へ罷越候處折惡しく退出より外へ廻り候付逢日を約束仕り罷歸り申出昨日一昨日公家衆御能等にゐ沙

汰無之兩三日之内對談尤先きの模樣に寄御一條は申候積に御座候越前守も角口を出不申樣工夫も仕候後の御内談より今日迄十一日に罷在候へ共いまた何等沙汰無御座候十の九は難物と存候へ共何卒其十の一へ落候樣仕度不堪至願奉存候此段御請旁奉申上候以上

九月六日　臣　彪　上

乍恐言上仕候新見伊賀守問答奉入　高覽候右に付ゐは御書被遣候方はよろしき樣了簡仕候處御書は不宜と被思召候はゝ又々罷出御書御頼之義可申立候へ共新見は實に頼母敷人に御座候間何の御爲にも御書被遣候方と奉存候尤御直代りの節愚臣御使に罷出此後御直書御往復等之節は運阿彌罷出候旨先き方へ打合せ置候委細は別紙共にゐ御推察可被遊候書外の意味は難盡筆紙此段奉申上候以上

重陽　臣　彪

九月三日伊賀守宅へ罷越座敷へ罷通り用人新井兵衞門と申者へ逢候て拙者義水戸殿側用人相勤候處前々水戸殿より御先輩樣へ當役の者を以　上樣御機嫌親敷奉伺來候付以後は御宅へ罷出候樣被申付候間御手透も御座候はゝ拜謁之上口上之趣演說致度此學校碑面榻本如何敷品に候へ共直書にて被相認追々御老中方等へも被遣候故輕微國產の浮龜相添私罷出候印迄に被遣候旨申述候處委細奉畏候へ共伊賀守未た退出不仕尤御待被遊候ゐも宜敷御座候へ共今日折惡敷退出より親類内へ被相廻歸宅も遲く可有之旨兵衞門申聞に付左候はゝ日限之義委細山方運阿彌を以御打合可申述罷歸候事

一山方運阿彌より日限問合候處來る七日八ツ時罷出候樣申來候に付右時刻罷出可申と存候處今日俄に御用出來芝より西丸へ登城仕候間七ツ時過罷出候樣又々申來候に付七ツ時罷越候處新見唯今退出の由にゐ早速對面先づ過日は弘道館御碑拜領尙又御國產拜領冥加至極奉存候別ゐ御榻本の義是迄拜見も不仕御大碑殊に御運筆と申御文作と申無所殘御儀長く家寶

に仕候旨吳々御禮被申上候に付過日兵衞門へ申述候意味直に演述兩御所
様御機嫌御伺被成候旨申述候へは兩御所様共至極御機嫌能被爲成御座候
上様には日夜御政務の儀御思念萬事乍恐御身を以ひきゐさせられ候　思
召にゐ御儉約等の義も皆御身の上よりひどう御心を御用被遊難有御儀に
御座候旨
一秋冷之節其許様にも無御障御勤珍重被存候兼々御名前承知被致候へ共
當春結構被仰出於水戸殿爲國家大慶被致候旨申聞候へは御懇之義難有仕
合誠に不肖之身中々當役抔存も不寄恐入候殊に此節御復古の御主意被爲
在候ゐ素餐の責難逃恐入候へ共乍不及心力を盡し相勤候心得の旨實意申
聞候
一水戸殿儀一家の義さへ不行屆御大政之義建議仕候段には無之候へ共事
により被存付候義其儘默々被仕候も被恐入候間品により建白も被致度被
存候處封書等御手元へ御賴み被申候ても不苦候哉若又御老中方へ被差遣

候方可然哉折角御爲をも被存候而も御模様に寄り害に相成候様の事も御
座候ゐは無詮義と被存候故是等の御事情等委敷承知被致度候」毎度別段の
御志乍憚奉感服候右様の儀は同列共へも申合候上ならでは御請仕兼候事
御座候へ共分ゐ被仰入候上は一存にて可申上候共御存意等年寄共へ御咄
し被遊候は御當然之御義勿論に御座候乍併御品に寄候ては英斷よりケ様
にも被仰出度と被思召候御儀も可有御座右は年寄共へ御建白之御品にも
被爲在間敷候間右様の御義は私御取次可申上候尤御封書に候へは其儘御
前へ差上け於御前御開封被遊候へ共一旦御前にゐ御開封被遊候上は乍憚
御事情に行違候義被仰上候ても間に合不申何を申上候も御立場柄より被
仰立候御義御不都合御座候ゐは恐入候間同敷は私あてにて被仰遣候へば
乍憚御尤の御儀は早速御披露申上萬一御事情に相違仕候義は乍恐私より
水戸様へ幾遍も御問返し申上候様に御座候へば無殘所奉存候尤御英斷よ
り御發し被遊度と被思召候事は稀なる御義に候へは先つ年寄共へ被遣事

に寄右之通り私へ被仰遣候方に可有御座哉毎度御賢明も承知仕り尚又此度厚く御爲を被思召分ゐ御懇命を蒙候故此段は無伏藏申上候旨

此問答ヶ樣に認候ゐは新見權も取何事も新見一覽之上ならでは不申上候樣相見候へ共全く左樣には無之　君上の御爲を不存候へは如何樣之事を被仰上候とても封の儘御披露はやすきに候へ共却ゐ御爲を存し右樣申候樣子尚又英斷よりと申事は重き御役人の進退歟奥向等にかゝり候事歟何れ御大切の儀故ヶ樣申候歟に被察候事

扨右問答之序に新見申聞候は其品をは申兼候へ共過日も越前守へ御存意御箇條被仰遣候處乍憚流石御名將の御存意此節言路開け下々御役人迄も追々建白有之處御立場柄とは乍申格別の御主意一同奉感服早速入　高覽候處　上にも殊の外御滿足再三御反覆之上夫々其筋へも被爲懸候歟に有之候と御稱し申上候」右樣之義は私抔心得不申段勿論に候へは何れ御咄之趣申遣候はゝ水戸殿にも嘸安堵被致候にて可有之旨相答候事

一弘道館御碑再三御稱し申上候に付扨夫に付御内談申上候は右學校へ上樣御筆被相願頂戴被仕候はゝ水戸殿始め代々の心得にも相成且家中共一統の勵にも拘り申候間被相願度尤平常懸置候樣の儀には無之御額字にても被相願表裝仕り一年に一度と歟の物日に拜し候樣の事に被致度含に御座候へ共右樣の義御扱ひ可相成哉若又御老中方え被申上可然哉　文恭院御書先代拜領被致候へ共是は御守殿を經候處後宮樣より被願候品にも無之樣被存候間御内談申上候旨申聞候へば「夫は私相應の御用向右樣の義は持前に候間何分にも取扱可申いよ〳〵御出來に相成候否は　思召次第故何等申上兼候へ共御願は私へ御賴にゐ宜敷既に田安殿にも被相願被進候又過日は年寄共へも一人々々へ被下置候御書畫共乍恐隨分御耻しからぬ樣御出來被遊候御字面は弘道館にてよろしく哉抔申聞候故」夫は水戸殿にも嘸大慶可被致國元へ申越候はゝ定ゐ早速被相願候にて可有御座御字面等の義得と御勘考の上被相願候て可有御座旨相答申候右にて　上の御

口上は相濟候振申聞候へは其節漸く手をあけ四方山の咄有之當時御改正の模樣我藩寅卯の頃に少しも相違無御座候此方より咄候へば手を拍てげにもと申事も有之又私共思ひ中り候事も有之候實に御國の正論有志と咄合候も同樣にて面白く相覺候程に御座候然る處日もくれ懸り候に付罷歸り可申存候處君夫人御一條申出度存候へ共諸事堂々たる正論の中へ何となく出し兼候釣合も有之乍去誠に用繁の中度々も罷出兼候故決斷仕り申候へば最早とくに承知の顏色長々申述候よりは其朝認候分懷中に用意仕り候口上覺全く私一己苦心の餘り見せ申候振に申聞候處再三熟覽扨此書付御預り申候ゟは都ゟ御自分心配も可有之候間返候由御事情は委細承知拙者ぎりに心得居候との事故御手をも經候事も有之候はゝ何分奉願旨申聞其口氣等相察候に」上の方は御十分御呑込御情合も通し居候水越迚も御無理とは不存たゞ天下の御大法と申處に相成至極の難物とは相成候歟」右樣の儀は御制度に拘り候故執政の職掌に有之又御留主居大目付等の職掌も有之六ケ敷ものに有之抔新見申聞候」御情合は十の九通し居候御法の方も又十の九强く相成候樣愚察仕候新見口上の內鴛鴦双飛と申事ちらと申候を以考候へは越州へ被遣候御書（上には越州ぎりと被思召候分まで）新見丸に拜見に相違は無之歟」右に付問答振委細申上度奉存候處先日も御意ゟ通り又川向の御疑惑を被爲生候ゟは恐入候間成否相分り候上可申上候

（鴛鴦双飛）本文虎の申聞候通り此方にては鴛鴦双飛と申既に越州への書面へも如右認遣し候へは文通ゟ儘を新見へ爲見候義相違有之間敷左なくば鴛鴦云々とは夢にも申間敷候

扨又過日越州へ存意書遣候と申義前に有之候處鴛鴦双飛の別紙も同樣八月十六日の書翰と一同に遣候義にて扨又十六日の書翰は越州の舊惡を我等より　上へ言上可致と疑ひ我等と太田をいみ候由承り申候却ゟ疑を晴ゟ爲にもと存足下の事巷說紛々御在職も六ケ敷に申觸し候所拙抔は元より浮說をは信し不申候へ共市虎も三人に成戒も有之候故云々

抔委細要石へ記置たる如く申遣候故右　上様へ御覽に入て我等も越州を惡しきとは不存段を申上度夫のみは出し兼候故双飛の別紙を越の方にゐは却ゐ本文に出し候半と被存候

是迄は　幕府御改正の釣合いつれにも呑込兼罷在候へ共新見に對談仕り明白に相分り申候新見御側に居候中は御改正無疑奉存候誠によき人物誠實顏色にあらはれ學問有之（口上相互ひ漢文通用）たしかなる人物且才氣もしづみ候て外へは見え不申談論仕候へは無據所にあらはれ申候先夜川路三左衞門へ罷越夜半迄談論新見の爲人承り候故罷越候處三左衞門咄よりも感心仕候委細は御目通り可申上先づ當御用のみ申上候

去る七日持參口上覺

今日始ゐ得拜謁前後をも不顧唐突申上候は深く憚入候へ共御用繁の御中度々閑を請候義も却ゐ憚入候間伏藏なく申上候は水戸殿領中土地改正尙又文武の義格別世話被致候段入　御聽候由にゐ格別の御譯柄を以其儘五

六ヶ年も在邑世話被致候樣當七月被仰出水戸殿は勿論役人共一統難有仕合奉存候然る處紀伊殿始諸侯方は長く在國被致候へば格別勝手向補にも罷成候歟に承知仕候處水戸殿の儀は定府同樣にゐ御膝元にのみ被罷在候故在邑の節は莫大入費御座候事に相成居候間從來不如意の勝手向彌增國元へは容易に難被相越勢に成行中古以來は一代一度ならでは在邑不被致候當水戸殿には相續以來國政の義厚く被存入此度にゐ兩度在邑被候へ共前條通り莫大ゑ入費に御座候萬端省略の思召を以右樣被仰出候上は如何樣にも仕法相立數年在邑仕り國政の義格別に世話被致思召に相當被仕候樣にとの主意にゐ精々下知被致候處小石川屋形燒失以來は鶴千代麿殿には庭內に假住居被罷在水戸殿の簾中には駒込屋敷大破の所少々補理被致候て住居被致御守殿幷國元都合四ヶ所に引離れ臺所等其外不一方用途に御座候間此度數年在邑に付ゐは簾中をも國元え下向被相願追々年限相立普請成就の上參府被致候へは一方の補にも罷成候半と役人共評議仕候へ

共先例も無之義表向被相願候も如何に付去月上旬私を以水野越前守殿御内意奉伺候處内室を國許へ被召連候義は諸侯一統不相成義故難相整筋に有之旨同月中旬御挨拶御座候に付又々江戸水戸役人共評議仕候處　公邊御規定と御座候上は最早可申立辭も無御座候へ共前件之通格別の御譯柄を以長々在邑之儀被仰出却ゟ勝手向取續き兼國政行屆兼候樣成行候ゟは甚被恐入候義尤水戸殿より被相願候て居延致候義にも御座候はゝ簾中下向の儀等内評も仕り兼候儀に御座候へ共格別の御譯柄を以　上より被仰出候御儀に候へは諸侯方隔年に御暇相濟自分願の上居延被致候類とは次第も相違可仕哉且三家方の儀は御移替の砌誓紙をも御用捨被遊候程之儀尚又三家方之内當家之義は八州内に被罷在御守殿は勿論鶴千代麻呂殿にも爰元へ被差置候義旁の意味御斟酌被成下諸侯方御故障にも不罷成樣又役人共内願之通り簾中下向之義も相整候樣何と歟御沙汰被成下候樣仕度一同及再議先年紀伊家にゟ清溪院殿在國中於紀州表婚姻相整翌々年參府の類例相添又々越前守殿へ御内意伺出候處今日迄も何等御沙汰無御座役人共一統痛心罷在候扨簾中迄國許へ下向と申儀何共如何之内願にゟ申立候も憚入候へ共勝手向必至と差支候而已ならず簾中年齡卅餘歲より四十歲餘迄前後七八年離別被致候段付置候者共悲歎の樣子は勿論最早此上本復生育は無之事に罷成萬一の節にも御座候はゞ格別太平の御世にゟは忍かね候義旁臣下之身に取候ては其儘難捨置至情にて御座候へ共七八年在邑之義　上より被仰出候御義の次第も相違可仕哉諸侯御旗本衆遠國被相勤候衆も數年を經候向は家内をも被召連候樣に御座候へは中には在所最寄へ被召連候類も可有御座や尤外に故障に相成候ては不宜旨水戸殿には精々被申聞候へ共外にと申候ゟも尾紀兩家の外には御故障にも罷成間敷右兩家とても此度水戸殿の如く　上より長く在國不被仰出候ゟは例にも罷成間敷哉抑役人共は頻りに一家の義のみ存詰罷在候義に御座候一體此度數ヶ年在邑之義誠に以難有儀には御座候へ共尾紀と違ひ御膝元に被罷

在候家筋長々在邑被致候ゟは家へ對候ゟは不本意に可有之多き家中の内には疑惑仕候類も相見え殊に勝手方役人共は用途補方無御座候迚相歎き簾中へ附置候者は生離別の情を申立候樣にては何程水戸殿精々下知被致候迚も衆心一致仕兼政事向へも相響き候半と役人共日夜苦心仕候臣下の身にゟ申上候は如何に御座候へ共古今共政事向改正等之儀始終持張候義は稀に御座候處水戸殿相續以來今年迄十三ヶ年の間聊懈怠不相致勝手向不如意の中にゟ武備等被相嗜候義も畢竟は御爲を被奉存忠誠報國の意味精々家來共へも教諭被致候義に御座候間とか出格の御沙汰御座候樣仕度役人共一統内願仕候委細は越前守殿へ申立置候得共若し御手を經候義も御座候はゝ兼ゟ御含宜御扱被下候樣仕度奉存候尤今日は水戸殿使にゟ罷出候義にゟ右一條申上候爲に得拜謁候次第には曾て無御座候へ共朝暮苦心之餘全く私一己之心得にゟ御含迄に申上候事に御座候間宜敷御憐察御座候樣仕度此段申上候事

九月七日　藤田虎之介

右虎之介口上覺書は越前より如何にも沙汰無之候故右之振に認虎之介心付にゟ新見へ遣候樣大意を認遣候處虎承知にゟ右之通り覺書に認新見へ出し申候口上にては立消申候故實は内覽にも入度心得にて虎迄申遣候事也

御親書御下け被遊謹ゟ拜見仕候乍恐左に御請申候

一伊賀守への御書昨十八日運阿彌御使相勤申候鮭十尺爲御登に罷成候處御用人等へも相談仕候へは一家へ十尺被遣候儀は御見合有之候間五尺伊賀守へ被下に取扱殘五尺は御用人へ相廻し候儀に御座候委細別紙に申上候

一湊出御被遊打續き御機嫌能被爲入候旨奉恐悦候何分御保養專一と奉存候　君夫人御一條今以何等御沙汰無御座日夜苦心仕候槍の穗越前守へ被遣に取扱候處別紙之通り御禮申上候間奉入　高覽候

一眞田信濃守快方に向去る十四日出勤仕候間同十六日罷越態々御無沙汰被遊候段委細申述候處信濃守義もやはり御同様わさ〳〵御疎遠に打過候旨吳々宜敷申上くれ候様にとの事に御座候三十日餘熱氣からまり大難澁仕候由いまだ色も青く顔も餘程度餘程の大病後の如く相見え申候扨色々咄付仕候へ共申さは御國御目付の如く　君夫人御一條抔に至候ゑはぎつちり仕何れ越前守より御沙汰可申との挨拶にて事情等毛程も泄し不申一向罷越對談仕候詮無御座候御役義餘程大義に相見申候

一伊賀守ゑ外有名の人物へ追々對談仕候義奉畏候夫々申込候間追々罷越候積りに御座候

右件々御請旁奉申上候

九月十九日　　臣　彪上

御城書追ゑ入　御覽候義とは存候へ共別紙奉入　高覽候笑はれ候の様ほめられ候の様分り兼候文儀に御座候扨又昨十八日の御城書を見候へは鮮鯛獻上以來は金貳千疋獻上候様越州より達に相成申候兼ゑ　御意も被爲在候御儀故奉入　御聽候以上

九月十九日　　臣　彪

九月十七日御城書　　松平周防守

先達ゑ常州平潟沖合へ異國船相見候節固人數差出候處右船は最早飄去候以後の由に候乍併一體程遠の場所にも候所早速手當行屆家來共出精致候段畢竟平生申付方宜敷故と相聞一段の事に候

右去る十四日水野越前守宅へ家來呼出書付相渡候由に御座候

物集女兵馬口上書

秋冷之節益御勇健被成御座目出度御儀奉存候將又來春御參府御座候へは御土産御品拜受被仰付御手當之處其儘五六ヶ年程御在國被仰出候に付段々御懇之義蒙仰此節時候御見舞旁以御使右兩種御肴添拜受仕誠以冥加至

極重疊忝仕合に奉存候右御禮以使者申上候以上

水野越前守使

物集女兵馬

越前守へ運阿彌罷越候は十六日夕に御座候處越州芝三田と申す下屋敷へ罷越候て留主に御座候由翌日御禮として兵馬運阿彌宅へ罷出候節申聞に昨日は主人義父子にゟ下屋敷へ罷越家來迄着具乘馬等にゟ甲冑調練仕り歸宅候へは御槍ゝ穂等頂戴仕候故初軍に勝利を得候迚大悦ゝ由申候由夫は早速水戸へ相運び可申と運阿彌申候處追ゟ兵馬より態々手紙を遣し甲冑調練ゝ義は御老中仲麿へ全く內咄いたし候のみにゟ表向に無之候間水戸へ御運ゝ義は御無用に仕度旨申來候乍併不奉申上候も不本意故奉申上候折角秘し候事故御近臣等へは御沙汰無之樣奉存候運阿彌迷惑に罷成可申奉存候扨又矢の羽槍の穂被遣候に付例ゝ通り落書には無之候へ共咄出來申候故御慰奉入　御聞候此度越前守へ水戸樣より矢の羽と槍の穂被遣候處御時節柄故輕き方を拜領可致申とて羽の方を戴き候へば御使者の申候にはめつたにつかむと拔ると申候へば越前大きに立腹にゟ左候はゝ槍の穂を戴可申とて戴候處越前守とり上げ見るに如何にも重く是は如何の思召かと承り候へ共御使者も不分候故水戸樣へ申遣し伺候へば越前守にはおもひやりがなき故被下との由右ゝ咄此節紛々にゟ此方の御爲　君夫人御一人御一條抔には別ゟ不宜よし別紙に申來る

呈一書候朝夕微寒を催候處愈御安泰被成御座奉恭喜候然は　君夫人御一條日夜御沙汰相待居候處委細今日御運に罷成候通り御整に不罷成御同意當惑仕候畢竟御懸合等不行屆候故と於野生別ゟ恐入候義に御座候乍然上樣御始め執政侍中等にも御情合をは御尤に被存候ゟも御制度に拘り候儀故不得已取扱候義と推察仕候既に此度の御內談書も追々の振にては御宅呼出ゝ廉に御座候處表向より奥御右筆調にゟ御城付へ下り候は臺所より出候を玄關より返し候樣なる扱に有之畢竟越州殿にも氣毒故に計候義

と存候扨外の儀にも御座候へば再應も三應も御内談も可仕候へ共此度の御事柄左樣も罷成兼候哉何分宜御了簡可被下數十日の苦心水の泡と相成上へ奉申上候力も無御座候間此段申上候宜御推察御申上に仕度草々擱筆仕候以上

（下ケ札）本文之義に付ゐは追々御直に御下知も被爲在候間今日も實は上へも呈書可仕處よからぬ事を申上候へば御胸痛へ被爲障候歟に奉推察候間御程合次第可然被　仰上に仕度ぞんじ奉り候

九月廿一日

追啓本文御一條不相整候段　公邊にてもあまり杓子定規を御守り御無理と可被思召哉と奉存候處かけ離れ了簡仕候はゞ乍恐　公邊にて御規定を御押ぬき被成候處も無據意味も可有御座歟酒井左衞門殿國替御沙汰止に相成大安心にて近所歩行願出候處前例は二日目位に濟候廉の處更に相濟不申右家來共又々心配手つるを廻し聞繕候へ共更に御模樣不相分候内五六日以前溜詰御免被仰出候如何さま御尤の御處置と諸人感服仕候右之通公邊の御模樣餘程はけしく御座候間何卒御家之義も此上萬端御都合宜敷君夫人にも乍恐御あきらめ被遊又　上にも御國政精々御世話被爲在候ゐ兩三年之内一と先づ御參府被遊候樣仕度存候以上

甚五左衞門樣　　藤田虎之介
銀次郎樣

不遠拜面と御無音仕候内最早冬も半に相成申候御安健奉賀候野生劣々平出羽のふる巣に籠居候御安意可被下候此地別條無之たゞ幕府御新政に付種々の浮説は有之候へ共能々承候得は大半は虚説取も直さす水國寅卯の頃の形勢に御座候先日奥の衆堅物ためし　上覽之處番町邊の某仁手あまり候弓を持出し打上け邊迄彎候哉否引きられ御幕串をかすり御庭番の横つらへ一寸計縫大騒動の由之處其御席にゐ幕を張候もの御糺し誰某張候旨申上け候へば幕の張樣不宜との御沙汰尚又怪我とは乍申射手も未熟な

る事と御沙汰有之射られ候ものをば療治等之義篤く御世話被爲在候其御席にゐしかられ候へば追ては御咎無之ものゝ由一同有難き御仁德に感候と御庭方物語の由に御座候五三日跡にも御庭方へ御菓子被下候處前振引込居候ものへは配分不致候へ共此度は先日の怪我人へも遣候へとの　上意にゐ配分の由扨右御仁惠はさし置先づ旗本の景色如此に候故處々の大的場抔めつたに見物は不相成物騷なりけんのんなり惡口相聞へ申候如何樣前の芝原にて日々射候を見候に三十日も射候はゞ御相手出來さうなる人多く相見へ申町方は兎角矢部々々に御座候先比も大澤彌三ゆり返しにゐ三度やられ町地面不殘御引上げに相成候處右は矢部兼ゐねらひ居候共なましゐに付出候得は政府にゐ大目に見濟れ候勢故大澤の抱屋敷地面を兼ゐ探り置右地面にゐ岡ッ引に博奕を爲始同心直に召捕吟味段々地主をせんさくにて實に大澤樣御地面箇樣々々の代金にて誰某の地面と號し吳候樣町役人に御賴み有之次第等逐一に印形付爲差出右之書付を政府へ申出博奕の義は御大法之通りたゝきの刑申付可申候へ共旗本町地面所持の義は職外の事故難及了簡とつき出し候由夫にゐ政府にゐ彼是大澤をかこひ居候人も無據ばた〳〵落著の由實にいらひどき扱ほめ候人も譏り候人も有之候其外右に準し申候折節客來半にゐ擱筆匆々以上

十一月九日　　虎之介

金右衞門樣

以手紙致啓達候御軍用菓錢拜領の義水野越前守殿より公用人を以山方運阿彌へ願出候に付先々便御同役樣へ及御文通候處早速御伺之上右菓錢一箱外に御貯の凌寒欵　思召を以爲御登に相成委細御同役樣より御書通之趣を以使者御禮申上尙篤く口上にゐ申述候段運阿彌申出候御序之節可然御聽に御入被成候樣致度此段得御意候以上

十一月九日　　藤田虎之介

今井金右衞門樣

越前守よりの口上覺書

兼ゝ奉願置候御手製之御品兩種拜受仕誠に忝仕合奉存候右御禮以使者申上候以上

水野越前守使者　關　橘　之　介

文月の中つかたおほやけの命によりて武藏へ來初はしばらくと思ひしにとゞまるべきおふせをかふむり五度六度になりゆきて冬も央に至りければ

十あまりいつか〳〵と待詫てひとりかもねむ冬の夜な〳〵

御一笑可被下候前書へ故郷の妻へ贈る文の奥へといたし可申歟呵々

是は虎より金右衞門へ遣候文通の中別紙にあり爲御笑留置

こゝろのあと

こゝろのあと

鄙翰啓上一別以來忽として四周星を過契濶不啻候御國難以來御盡力之段々貴兄之御至誠元より左樣可有之筈には候得共郡陰凝結之中に風節凛然と御扣しかも剛柔緩急の御手順其外萬端無殘所良將の兵を用ひ良醫の病を治るか如く事々其機宜に應し候御所置實に迂濶頑鈍僕か輩の及ひ候所に無之乍憚致敬服候僕歸廬以來は時々事情等御示諭被下不堪感激之至候然るに是迄絶て一信をも不通候はあまり人情に近からさる儀と御訝りも可有之處四年來の禍天步艱難とは乍申一つには有志の士輕卒疎漏より事を誤り候儀不少右之覆轍を踏候ては一身の禍は指置　老公御洗寃を妨け候に相當り決而不相濟事に候間親戚の外一切面會書通等不仕候扨丙午丁未も殘り少に相成弘化の不祥年號も近々改元可相成來元日の立春旁　老

こゝろのあと（嘉永元年）

公御洗雪の期近寄候樣被存候處是迄も必定と存候儀追々齟齬致し候間同志一統いよ〳〵油斷なく警戒有之度事に御坐候先つ是迄之勢天時を以論候へは紀公の御卽世定女の物故抔扨々折惡き儀今井の不祿も命數とは乍申嘸妖僧共因果報應の談柄と相成可申又人事を以論候へは當春折角微陽を催し候折から梅巷舊廬にて醉酗の一件如何にも愚を極候始末又は朔獨木橋の御內意相發候以來一段之正氣を增候砌江南張訴の一件奇怪千萬の致方右の如く少しく愉快の事有之候度每に至愚奇怪を働き有志の瑕瑾を生し小人の口實をふやし候樣にては此上中街の諸子抔夫々歸廬にも相成候はゝ追々の機事等一時に漏泄如何樣の事を生し候も難測日夜痛心此事に候抑僕儀御承知之通り去年中より下部へ梅核の如く凝を生し當四月より夥敷下血五月より右の凝痔漏と相成七月分脫肛其後小便閉等の變症に相成醫師の申聞に任せ療治致居候はゝ必定今井分も黃泉の先かけ致候儀差見の處天いまた頑鈍を棄玉はす候哉又は閻魔にさへ嫌はれ候哉一旦豁然として病狀發明仕候儀有之速に醫師を斷り自分にて調藥養生致候處先々當分の樣子にゐは容易に泉客とも相成兼候乍然右醫師より親類共へ申聞候趣にゐは自分療治致居候內には必再發の患可有之又は勞癈に變候も難計と申候由いよ〳〵右說の如くに候はゝいまた全快とは難申且痔漏は扨置人生元より朝露致候事も不相叶甚不本意之事に候間心付に任せ左に相認遺言同樣の心得にゐ全く貴兄迄御廻申置候間宜御取捨御同意の事も候はゝ他日貴兄分御建白可被下候尤左のヶ條は全く天步艱難中當坐の事多く第一は　當公御敎導のヶ條而已にゐ其外は尋常老婆心の論に御坐候神州の大道を明に致し候に至候ゐは弘道館記述義と申著述脫稿仕候間僕か平生の學問見識他日是にて御承知可被下候意長紙短草々閣筆頓首

一陽來復の月初五　をのゝたけき

たかはしちかゆきぬし

再啓過日御廻しの御別冊幷貴兄御手寫之分返璧仕候御別冊之內赤紙は御

筆誤等ゑ分に御座候

又啓近來頻りに神發流の假名御用に相成候處一體秘密の書簡等人手に渡候上にゐは何文字にゐもたまり不申左候へは神發文字にても如何樣に歟致し其文字を存候人を抱込讀付け可申又更に讀兼候へはひそかに合言葉合文字を御製し如何樣の事を歟御巧被成候半と讒言可致右ゑ通にも相成候はゝ却ゐ讀め候ゐ事柄あらはれ候ゐは遙に其害深く可有之いつれひそかに文字を御製し密事へ御往復と申事に相成候へは又例の御制度にふれ云々の覆轍にて不容易候間御流儀御藥法等ゑ外はあまり御用無之方と奉存候前にも申通り人手に渡り候上にゐは何文字にゐもたまり不申候間人手に渡り不申樣致候が專一たるへく有志の士も平常右假名を扱候内には自然人目にふれ候も難計人目にふれ候へは右異樣の文字と申所にゐ最早讒の種に相成申候其外かくし名等も大低程か御座候儀あまりに陰氣なる事而已致候ゐは人を姦邪〳〵と申内此方にても姦にまきらはしき樣に可相成候左候へは第一に事を愼密に致可申は勿論に候へ共愼密中にも公明正大の氣象有之萬々一天下の吟味に相成候とも存分申開き有之樣にと御同樣心かけ度事に候はすや

かくし名の事に付一笑柄有之候八月中旬小兒共裏の太田誠左のかき根こしに槍の通り候を見付候ゐあれは何人の槍なるへしやと問候ゆへ定めて暇乞に奥津歟岡部抔能州へ來りしなるべしと答吉田又彦側に居候處豆腐には無之甘草に相違無之と相見候と云小兒子供心に怪み其夜に入問て曰なせ重き人をば豆腐だの甘草だのと申候哉野生笑ひながら曰く重き人は豆腐の如くやはらかにて又甘草の如く甘きゆへなるべしと云何か分らぬ樣子にゐ問返しも不致候所其後豆腐を買度毎に今日は重き人を買たりとて隣家の小兒抔へ申聞又野生打續き甘草入の藥を用ひ候へはをとつさんは重ひ人のはひつた藥をあかるとか何れにも指支色々の事にゐまきらかし近來は止候へ共甘日計の間實に困り候へきかくし名も常になり候ゐは其害如此御一笑

當　君公を御親み被遊御敎誨ゑ上御成立被遊候樣奉祈望候事

天子ゑ道は天性也と申し殊に老公ゑ御賢明　當公の御美質と申し旁　御父子樣の御中御親敷被爲在候段は不及申上候へ共下々と違ひ高貴の御方は御住居も離れ御附とも分れ兎角愛よりは敬の方勝候ゆへ惡敷仕候へは御遠々敷患も生しやすくまして御國難以來は御連枝樣方御後見にゐ天保

の御政事皆瓦解仕候へは　老公にゐ嘸御鬱憤可被爲積　當公には未た御幼年被爲渡候へ共有司とも　思召々々と申候ゐ被　仰出に取計候其度毎に　老公御代の事は皆御惡政の振に申上候事と相見候へは　當公にも自然と　老公の御風儀を御嫌ひ被遊候樣成行候も難計其所へ小人婦女付込ケ樣〳〵の御噂被爲在　御父子樣の御中にて御情なき御事抔種々侫辯を振離間仕候義古今のためし不少候間乍恐御用心被遊候ゐ可然御事と奉存候風に伺候へは近來　老公には　出御不被遊候由如何樣の　尊慮歟は難奉計候へ共萬々一御遠々敷御模樣も被爲在候ゐは　國家の患無此上窃に恐懼痛心仕候當時有志の議論一般に御寃罪御開晴に罷成候樣奉祈望候處何程御開明に相成候迚も　當公御成立の上　老公の御風儀を御嫌ひ被遊候ゐは　老公の御志は通り不申扨又　老公の御風儀に御化し被遊候へは此節は御連枝樣方へ御まかせ被差置候とも終には天保の政に御復し被遊候樣罷成可申此二つは國家盛衰の分れめにゐ實に御大切の御事に御坐候處　當公御二十歳に被爲成候へは必定とちらと歟相分り候儀左候へは僅に四五年の内　老公御敎誨の御厚薄にゐ國家ゑ盛衰相決し候御事ゆへ乍恐何事を被差置候ゐも　當公御敎導ゑ御儀は時々寄々被爲懸　尊慮候樣奉祈望候乍併此儀は小人姦吏の尤忌憚り候事に御坐候へは種々御邪魔申上候儀差見候處夫を御立腹被遊候ゐ御遠々敷被遊候ゐは小人の術に御陷り被遊候に相中り何とも殘念千萬ゑ御儀に御坐候仍ゐは縱令如何程御耳障ゑ儀等入　御聽候とも聊御頓著不被遊　御守殿御機嫌御伺被遊候度毎には必御本殿へ被爲成寛々御談話被遊御稽古事其外御鷹御囃子等御催し被遊扨又御年頭其外差定り候廉は勿論其外にも上野御參詣の御歸り等には　當公必駒込へ被爲入夜分迄も御談話被遊兎角御敬よりも御愛の方かち候と被思召候程に御仕向け被遊（乍恐夫にても敬の方御かち被遊候はんと恐察仕候）日々月々に御近しく被遊候へは　御骨肉の　御至情必御風儀に御化し可被遊左候はゝ假令　老公にゐ御政事に御携り不被遊候迚も矢張御携被遊候

も御同樣ニ儀況や御寃罪ニ儀最早不遠御洗雪に罷成候は差見候間旁國家ニ福不過之奉存候

御連枝樣方御疎遠不被遊候樣仕度奉存候事

御國難以來御連枝樣御後見被成候處乍憚御自分々々の御家政さへ御屆き不被成御後見所には有之間敷殊に一月三度位御屋形へ御立入御世話御屆被成候筈無之第一　老公御寃罪と申所へ御心不被爲附小人とものたてものと御成候て天保の御政事追々に御破壞被成候段言語同斷ニ御儀嘸　老公には御苦々敷被　思召候半乍併畢竟は　幕府ニ命にゐ其命を御守り被成候事に候へは世上通例の御人にゐは先つ當り前と申者と奉存候讃州樣は御後見ニ儀深く御好も被成間敷哉に候得共大學樣抔は以前と違ひ小石川諸人ニ尊敬も格別而已ならす御拜借金等も御自由に相成候勢故右御家ニ君臣は鄙語に申候如くしかみ附候ゐも離れぬと申　御風情に可有之又此方有司ともは御連枝樣御離れに相成てはたてものを失ひ　老公へ御威權歸し候半と存候ゆへ頻りに御すかり申上候半ゆへ讃州樣にも流石惡敷もなき御心持にて今以便々御後見候成候事と推察仕候扨　老公尊慮は連枝共愚物にゐ我等の家政を取亂し不束ニ至に候我等方へ手をさげ來候迚もろく〳〵愛相致候には不及況や此方より彼等へ手をさけ賴み可申筋は毛頭無之と被　思召候半歟乍恐夫にゐは役御方々と御引はり被遊候御見識に可被爲在哉彼御方々は乍憚論するにたらさる御人物に候得は更に御相手に不被遊却ゐ御胸中へ御容被遊折にふれ候事にふれ駒邸へ御招請も被遊　御心を御攪被遊候方歟と奉存候最初は三御連枝樣も氣味惡敷可被思召候へ共懿親の廉を以厚く御あしらひ被遊候はゝ彼御方々も必御信服被成中心より御耻入被成候樣可相成哉只今の姿にゐは　老公の御前は所詮御不通りと思召候故此上　老公御政事へ御携被遊候はゝ如何程ニ御察當可有之哉と御苦勞被成隨ゐ右御家中共も憂懼仕居候故義も耻も御忘被成候ゐ此方有司一同に防き矢の御工夫のみ被成候歟と奉存候當時有志の

士　老公御開明を企望仕候餘り三支封の君を悉惡み候處いかさま惡からぬにも無御坐候へ共元來御思慮淺きより起り候にゐ仙臺騷動の伊達兵部少輔後見にゐ姦智を振ひ候抔と同日の論には無御坐候間前文申上候通り更に御相手に不被遊御胸中へ御容被遊此御樣子にゐは　老公御政事に御携被遊候ゐも御連枝樣方へ格別御たゝりは有之間敷と右御家々ゑ君臣一同安堵仕候樣御あしらひ被遊候樣仕度候事

備前守始め舊家の心を御攬被遊候樣仕度候事

君は舟臣は水水能舟を浮べ水能舟を覆すと申儀兼々金言とは存居候得共甲辰の御國難に付ゐは右金言別ゐ存當り感服仕候抑御國難ゑ起源を尋候に學派にゐ黨と名附候學派の說主張仕り尙又天狗の名目申出候人物等委細御承知被遊候半と相略し申候より漸々に釀し成候事にゐ一朝一夕に非す候へ共其病症のあらはれ候所を以て論候へは小人とも銀次郎虎之介等を斃し權を專らにせんとたくらみ候より事起り候ゐ恐多くも　老公迄禍に逢玉ひ候段水の舟を覆し候と同樣に御坐候小人の謀計今更思ひ當り候事數多御座候得共事長く候文略仕り候扨銀次郎虎之介等其きさしを見候はゝ速に引退き候歟又は事情委敷及言上御英斷を願可然筈ゑ處確證も無之儀申上候ゐは人を讒し候樣可被　思召との嫌忌をさけ尤一度ならす引退可申とは覺悟仕候へ共其時々御懇の　盛意を奉感佩頻ゐ退役も不相願候內右ゑ御變に相成候段何れゑ道其罪遁れかたく尤舟を覆候とは違可申候哉に候得共舟を覆され候迄うか〳〵罷在其期に臨み候ては御救申上候事も不相成死有餘罪とも可申仕合に御座候扨御國難に付ゐは第一に舊家大臣申合御寃罪を洗雪仕候ゐ可然筈に御座候へ共己丑ゑ年罪を蒙り候榊原赤林を始め右同類ゑ者は元より　老公を怨み奉り又己亥ゑ年罪を蒙り候額田小山伊藤岡崎ゑ黨も同斷に可有之其外鈴木朝比奈與津藏ゑ類は皆御役方より外補仕候者に有之晴軒靜閑齋等は不慮に退隱被　仰付候者にゐ何れも皆不平の輩に有之一體布衣以上の家々委細に相糺し候へは十に八九は親類緣者にゐ其氣脉相通し居候ゆへ堂々たる大藩の舊家一人として御寃罪を

相嘆き候者無之而已ならす剰御寃罪を訴候彦九郎又衞門等を嚴科に被處可然旨申立候始末言語同斷に御坐候　御國難の節御寃罪を訴候心底の者は皆幕府より罪を蒙候故口出し不相成又舊家大臣は本文之通り兼々不平にゐ殊に御懷合も不存者多く只寅壽壹人は家柄と申是迄御政事に任し莫大の御恩を蒙候へ共幕府の御咎めに泄候こそ天の幸に御坐候間一人にゐ大事を引請銀次郎等同樣罪を蒙り候覺悟にゐ幕府へも申立支封の君を激勵奉り風節凛然と右扣居候はゝ　幕府にゐも御疑一時に氷釋可仕萬一天時至らすして又々寅壽迄罪を蒙候迚も天晴大忠臣にゐ結城宗廣の家をも汚し申間敷候處無其儀段口惜き事に御坐候右に付寅壽儀は最初より　老公を傾け奉候謀計仕候樣申觸し候者も御坐候へ共銀次郎等を斃し權を專らにせんと志し候は相違無之候得共　老公迄傾け奉候所存は有之間敷只藥法きゝすき候ゐ　老公迄右の如く被爲成候は寅壽も驚き候事と奉存候畢竟五月六日より心底くらりと引替り候故最初より云々の謀計有之候樣に迄人々も被疑候半且は晴軒并大乘寺常福寺藥王院の類は　老公御退隱の事迄たくらみ候歟も難計候へは寅壽儀も心服仕間敷但五月六日後の儀は如何の謀計廻し候哉一切相分り不申候事　右之通舊家之者とも一同有志の士を敵に致候上は乍恐　老公とも御向ふ方に罷成候姿に御座候間今日にも　老公にゐ御政事に御携り被遊候はゝ面々如何程のうきめを見候も難計と内心恐怖仕居候故色々と流言等仕御邪魔仕候事に御座候左候へは　老公御味方と申候ゐは兵庫頭能登守彌右衞門庸之介織部次郎左衞門軍平位ならては有御座間敷右之内兵庫庸之介は隱居之身分庸之介はたとひ隱居不仕候迚も例之通り事こはしの人物たゝ決して御向ふには不相成と申迄にゐ格別の御用には相立不申候　次郎左衞門は大臣と申にも無之軍平迚も御取立に候へは僅に能登守彌右衞門織部織部儀は寅壽御推擧申上候者に候得とも御國難後一義士の至誠に感し正論に與し候内本文にも申上候通り舊家は大低緣者由緒多く卽ち織部も寅壽緣者にゐ殊に藏人の婿に御坐候得共右等之事迄吟味仕りより嫌ひ候へは甚六つヶ敷誰の緣者にゐも誰の推擧にゐも正論にさへ與し候へは感心なる事と奉存候　三人に御座候其外には彦右衞門清太夫抔堅固の人物に候得共是以大臣と申にも無之羔次郎抔誠實の人物に候得共事に任し候才幹は御試みの上ならては不相分いつれ右之通り御人々乏しく候間外に舊家之族をも夫々御使ひ不被遊候ゐは不相叶事と奉存候所詮御使ひ被遊候からは矢張只今之内より御心組被遊備前守始め巨室世家之者共夫々御目を被爲懸縱ひ中心より悅服仕候程には不相成候ともせめて御向には不罷成此御模樣にゐは　老公再び御政事被遊候とも面々別條有之間敷と安堵仕候程には被遊度御事と奉存候尤數十人の者共を一々御愛相被遊候樣にと申上候には無之主將の法務めて攬英雄之心と申如く舊家の内にも夫々頭取之英雄眞の英雄に無之段は勿論に御坐候全く譬たは申上候事に御坐候　御坐候間其英雄共さへ屈服仕候へは其餘は

皆風靡可仕候只今にゐは御隱居樣ゑ御事にも被爲在候得候　西山公の御風儀を御學ひ被遊候ゐ御丁寧に御書等被下置其人の長し候所の藝術又は物數奇ゑ廉或は先祖勳勞等ゑ廉にゐ御懇の御意被爲在候へは流石君臣の恩義感激不仕筈は無之夫にゐも御向ふに罷成候者は人面獸心に御座候本文舊家の心を御攬被遊儀何歟術の樣に候得共大臣を體すと申儀尙又罪を巨室に得ざれ抔申す語經書にも相見へ西土郡縣ゑ世界と違ひ封建世祿の御制度にては舊家の御扱實に御大切ゑ事と奉存候乍去大姦と御見ぬき被遊他日は必御退け可被遊と思召候ものを先つ御あいそう被遊候は御術にて不宜段是又勿論と奉存候委細は御承知被爲在候御儀と文略仕候夙に相伺候へは備前守知行所名目ゑ事郡官共へ御懸ゑ上封書を以御請申上候由只今の郡官共內密　老公へ申上候儀を其儘罷在候義は出來申間敷候間必政府へ內々耳打仕候義は差見候儀政府より又備前守へ油斷不致候樣抔と內通仕候も難計又夙に伺候へは石見守加祿信濃介別騎帶刀白銀拜受ゑ事等御察當被爲在候由是等も自然當人々々へ相響候も難計左候ゐは彼輩防き矢用心ます〳〵固く相成候半と過憂仕候夫共御察當被遊候儀を御尤と奉存候ゐ相改候へは宜敷候へ共一向忌憚り候義も無之既に帶刀事を御察當の後却ゐ舍長被　仰出候にても相分り候儀に御坐候左候へは御察當被遊候度に却ゐ御威光を御損し被遊候而已ならす　公邊へ對し候ゐは　老公今以御改事ゑ儀御世話御やき被成候には一同甚差支候抔と彼輩の申草を御ふやし被遊候迄と奉存候有志の小年抔は憤激の餘有司共の事を一概に姦と名付候歟に候へ共同し御家中へ名目を付け候儀假初にも不宜事と奉存候愚眼を以鑒定仕候ゐは姦人と申程の者は何程も不相見先は孔子の所謂鄙夫のみ多き歟と奉存候乍併是を失はんことを患るときは至らさる所なしと申通にゐ面々の役儀祿高を惜み候よりして種々の謀計を廻らし無罪の義士義民をも火附盜賊同樣に取り計候類皆其身を愛し候より起り申候其所を以て姦と申候へはのがれ兼候へ共一體は犬鼠の人に喰附其毒にゐ人を殺し候に至候得共彼か心は其身を惜候より起り候にひとしく鄙々劣々憫笑すへき心底に御坐候然るを是も姦彼も姦と目し候へはます〳〵鄙夫の黨類多く罷成り其當人々々而已ならす子々孫々迄も派を

分ち黨を立候樣成行國家永世の大害と奉存候孔子も人として不仁なるを
これを惡むこと甚敷は亂也との玉ひ候間至極の姦物と御見拔き被遊候分
は格別其他は御恢弘の御大量を以廣く御容被遊一人つゝも德に化し善に
向ひ候樣被遊度御事と奉存候一體御國難之義　幕府の御不吟味は勿論に
御坐候へ共今は　幕府にゐも內實御後悔は指見へ候儀乍併　幕府の御ま
け惜みは今に始らさる儀東照宮の英明にゐ大久保相模守寬罪を蒙り又大欲公の青山伯耆守を罪し玉へる類ひ何れも其子孫を御立被遊候程
に候はゝ當人々存生之內洗雪の御沙汰有之候はゝ如何計歟美事に被爲在候乎　夫ゆへ羽州庄內の國替抔眼前　幕府の
御無理より起り國中騷立候に至り候處追ゐ國替御止は聞へ候へ共酒井隱
居被　仰付候は御まけ惜みの御沙汰に有之又仙石家御捌きは近來の盛事
に候へ共代々襲ひ來候舊知減祿被　仰付候は遺憾不少儀酒井は國元騷々敷仙石は家中二分れに相成候御咎と相見候へ共無故國替御止被遊又松平周防守等仙石家の姦人へ組し候故有志の者寬罪を蒙り國も危く相成候に付右家有志の者身命をかけ告訴を心掛候處其告訴逐
一尤と相成候故周防守は勿論姦黨死罪にも相成候程に候へ共其上に酒井は隱居仙石は減祿仕候ゐは右兩家の忠臣共騷き立候が爲に旦那は隱居又は減祿仕候姿にゐ嘸內心には不
本意に可有之とかく理にゐも非にゐもたまつて居候樣にとの御仕向いわゆる武斷の政と
申者にて聖賢の政には無御坐候乍然往古より右の御仕向にゐ家中二分れに相成候へは詰

る所主家の不爲と罷成候儀越後騷動其外類例多く相見申候仙臺騷動抔も小家に候はゝ必
減祿可仕候所主家は幼年の故を以家督無相違賜り候へ共實は大國を御憚り被成候歟と奉
存候扨右等之昔語りは姑く指置　公邊の御風儀如右候上は有志の士第一に此儀を用心不
仕候ゐは不相成候處甲辰以來小人共讒訴の爲に有志の者禍に逢候を憤り又　幕府の威を
かり小人共を嚴科に處し候半と志し候樣にゐは聖賢の　幕府に候はゝ善惡黑白相分り可
申候へ共武斷の　幕府にゐは詰る所例の家中二分れと申廉に陷り可申哉況や仲町へ御預
ケ之者共　幕府にゐ御吟味之儀抔一寸承候へは儉快　畢竟右の御風儀に候ゆへ甲辰
の樣に候得共前文の杓子定規尤可惡事に御坐候歟
五月の被　仰出今更御後悔は被遊候ゐも被　仰出直しにも不相成兎角最
初御見込之通り連枝方後見家老衆申合云々と申廉にて押拔候御積と相見
候へ共御內實は御後悔に候へは御連枝樣と御家老共御申合候ゐ　老君御
後見之儀　當公より御內願にさへ取扱候へは　幕府にゐは渡りに舟と御
すませに可罷成勢と奉存候然る所　當公より御內願所には無之　幕府有
司を誘ひ候ゐも防き候風情ゆへ今に相成候ゐは甲辰五月は勿論十一月廿六
日の命令をも後悔致候半されは只今の患は　幕府には無之此方の有司に
止り申候此方有司は前文之如く犬鼠の身を愛候餘りに人をおそれ人をお
それ候餘りに喰付候事に候へは聊御引はり不被遊廣く御容被遊やゝもす

れは尾を引込齒をむき出し候患無之樣仕度奉存候申上候迄も無之候得共二公子御南上以來は有司も腸は青く罷成居候間面々の身分さへ苦勞無之と存候はゝ存之外義兵を起候者可有之も難計假初にも當時之政府中より旗をあけ候者有之候ゟ幕府のもちにつき居候所へ應し候へは御開明は破竹之勢に御坐候間乍恐能々深遠之御思慮被爲在候樣仕度奉存候

幕府之御政事向此節は先つ御口出し不被遊候方可然哉と奉存候事

幕府の御政事辛丑の年一寸御改正らしく相見候處第一に殘念薄情の水越鳥甲を御用被遊候ゆへ御改正々々と申内に印幡堀割大坂課金等之惡政起り太田退隱矢部寃死に至り候ゟは其患日に甚敷異船打拂御止尙又　本藩の國難に至候ゟは天下之大變とも可申奉存候鄙諺にも申候通り無理が通らは道理引こめと申す如く先々此節は道理の論所詮通り申間敷殊に　幕府は父兄にゟ本藩は子弟の御家筋に被爲在候へは父兄如何樣之無理を申候とも其意にさからはず其怒りを解候を待候儀子弟之常道と奉存候風に伺候へは閣老へ時々御文通被遊御醫師惣髮邸中にゟ大砲爲御打之儀等御問合被遊候由わざと御試に小事を御問合せ被遊候　思召とは奉恐察候へ共彼方にゟも今以かゝる小事迄をも御執着被成候樣奉存候も難計且又朝鮮信使來聘易地之儀も御建白被遊候由深遠之尊慮にゟ御尤之御儀には候得共朝鮮之儀は邪教之國とも違ひ候へは大坂へ被召候迚も格別之患も有之間敷（一體朝鮮との御交り京都を御立被遊候ゟ　幕府にゟは將軍の御名目にゟ御應對被遊候へは朝鮮と五分々々の御禮式にゟも又其上にも　京都有之候ゆへ國體よろしく候處江戸を本に被遊候ゟ御往復被遊候ゆへ日本と朝鮮五分々々の如き姿に相成於國體以之外不宜奉存候扨文化の度對州にて御受と申し諺に申候くるしかりにゟ不得體候間又々易地の議起り候も一理有之是は水越閣老の時とは乍申其本は岡本忠次郎の建議に御座候先年忠次郎の直話をも承候處色々竝へ立候ゟ大坂の方宜敷旨内々申聞候得き其の腹を察するに忠次郎も書生に候間一つには有名の學者とも指出し朝鮮人と詩文の應答爲致日本近來の文運に誇り申度樣子に候得き乍併是は忠次郎詩人の名を得候一癖にゟ何の益もなき事と奉存候）殊に　文恭公御在世の節文化之通と被仰遣彼國にゟ承諾仕候を又々大坂と被　仰遣夫をもしふ〳〵承諾仕候を又々對州にゟとは被　仰遣兼候御手續に可有之畢竟度々信を御失被遊候故彼方にゟもずるく罷成十年御延之儀等申上候樣相成彼國の腹を察候に十年過候内には又何歟兩

國の内變事等出來御流に可相成見込と推察仕候扨朝鮮人萬一西洋夷と和睦仕候樣之事も有之候はゝ此方より如何樣に約を變し被　仰出候共御辭有之候へ共當分之處にゐは如何にも大坂と御居置之外有之間敷然を乍恐ひたすらに閣老を御攻被遊候はゝ餘前後手續の御勘辨も不被爲在候樣可奉存哉賢人君子なれは能人の言を容候へ共通例の人情にゐは出來ぬ事を攻付られ候へは或は怨み或は怒り候儀めつらしからす既に越州抔をも餘り御攻被遊候ゆへ御遠け申上候勢にも罷成候樣奉存候勢州は越州の如き殘忍には無之由に御坐候へ共大量の君子とも不承候へは何れ平常の人の御見通しにゐ被差置候方と奉存候左も無之ひたすらに御攻被遊候得は水府公には　公邊の御政事さへ如此御口出し被遊候御一家の御政事は尙更と相見へ如何さま連枝方家老中より精々申立候尤之儀と申樣に相成御連枝樣幷御家老共の申立へ御證印御押し被遊候にひとしく可有御坐と甚苦心仕候尤何程御政事に御携無之樣兼ゐ被　仰出候迚も　老公の御立場にゐは天下之大事其儘には御見過し難被遊と被思召候儀も可有御座哉夫程の御儀に候はゝ縱令如何程の御不首尾をも御顧不被遊御直言被　仰出候とも敢ゐ彼是不申上候乍併右樣之御大事容易には有御坐間敷奉存候間先は御默々被遊候方　幕府の御氣受宜敷可有之而已ならす聖賢出處語默の道にも御叶ひ可被遊哉と奉存候

天をも御怨み不被遊人をも御尤め不被遊御謙遜を御守被遊候はゝ幾層の御盛德を歟御增可被遊と竊に奉企望候事

甲辰以來の事天地神人の共に憤り候儀　老公御心事乍恐奉想像候へ共右御寃罪御一洗被遊候思召に被爲在候はゝ却ゐ御一身を御省み被遊諸事御謙遜を御守り被遊御洗寃之儀は自他有志の盡力に御任せ被指置候方格別之御盛德と奉存候然るを彼是と御辨解被遊我等は毛髮程の過失も無之候を奸僧之讒言　幕府之不吟味にゐケ樣被仰付候抔と申御風情にゐは縱令御趣意は御尤にても　幕府方にゐ伺候へは御遠慮不被爲在候樣に可奉存

且は前件に申上候通子弟の御道におゐて如何と奉存候左候へは御筆記等も他へ泄候半と思召候分は乍恐御心を御用ひ被遊譬へは此ケ條は天下ゑ爲と思ひ候ゑ致候事なれ共餘り事勢の勘辨なく一概に致候ゆへ御疑心を受候段畢竟我等赤心而已にゑ不行屆候故に有之又此ケ條も忠孝ゑ至情より發し取行ひ候へ共餘り火急に致し候ゆへ人心を激し變難を來し候儀畢竟我等の不働き也抔と申如く事々御一己を御省み被遊候ゑ聊　幕府を御誹り不被遊御謙遜中に御忠誠は溢れ候樣に御認被遊候へは　幕府有司は勿論假令入　台覽候迚も御尤と思召中心より御耻被遊候樣可相成奉存候兎角自他の人情にかたきと申物有之旗本は旗本がたき有之どこ迄も　公邊の御威光をたて候ゑ談し候へはころりと罷成左も無之候へは何事も耳に入不申ぴんとはね付候儀川路江川等都ゑ一樣に御坐候尤今一層上手（うわて）の人物に候はゝかたきも有之間敷候へ共先は右の風儀に御坐候間乍恐御秘錄等容易に他へは御泄し不被遊候樣仕度奉存候一體甲辰ゑ事　幕府御無理は不及申候へ共今更相考候へは先年の御政事向も種々手順相違仕本末前後緩急ゑ次第取失候事も有之是は皆御役人ともの不行屆にゑ實に奉恐入候儀尤外の事は手順等相違仕候と申迄に候得共君夫人御下向御願ゑ一條に至候ゑは　幕府第一の規格に觸候事にゑ其節は五六年の御暇押付に被　仰出候を殘念に存且は北地御成就ゑ節の御手順と申所に泥み御願に取計候へ共此一條而已は天下後世に至り候ゑもあまり成事と可奉存愚臣の罪無所遁扨々恐入候仕合に奉存候右ゑ如く自分にゑ考候ゑさへ無調法有之候故他ゑ人口にゑは如何程か誹謗仕候儀可有之扨又水越州殘忍薄情には候得共名を好み候人故右在職中は　老公を御遠け申上候而已にゑ罪をは御きせ不申上候處右越州癸卯の秋退役　幕府の勢丸に相替り又内には小人奸僧等謀を廻らし緣ゑ下に火の廻り居候にも不心付四月ゑ奉書に至り始ゑ驚入候段今更相考候へは餘り等閑ゑ儀と千懺萬悔仕候儀に御坐候扨其節は浸潤ゑ譖膚受の愬内外より入　台聽候儀と相見第一に表にゑ

福山後宮にゟ市女を疑心仕候處近來に至候ゟは此兩人却ゟ御洗雪の方へ盡力仕候歟にも相聞候得共何れ最初は此兩人國難を釀し候取次仕候は指見候儀只今有志の精神表奥へ通し居候か如く甲辰の難を釀し成申候にも又姦僧等の精神表奥へ通し候は勿論と愚察仕候右釀成候には必定過分の藥も相廻り候半其手續有之候上は今以安心は不罷成尤福山市女何れも利口者の由には候へは今と相成候ゟは洗寃へ組し候方自分々々の身爲にも宜敷と存候歟に推察被致候へ共踏込候ゟ言上仕兼候は畢竟甲辰之手續と齟齬仕候故と奉存候左候得は右兩人へ御腹心御明し被遊候は不容易乍併又兩人を被差置他人を御遣ひ被遊候は尚更御宜からす何れ御深入不被遊時節を御待被遊候方歟と愚慮仕候右等之儀とくに御洞察も可被爲在所へ委細に申上候段布鼓を持して雷門を過候譬に等しく候得共苦心の餘り吐露仕候臨書不堪恐懼之至候以上

昨夜御下ケ之御親書謹ゟ奉拜見候金右衞門御轉之儀に付愚存奉申上候處御懇に　尊諭之趣難有仕合奉存候乍恐左に御請奉申上候

一寺社御改革に付金右衞門寺社奉行被　仰付其他庄藏佐之衞門等調役被仰付織部若年寄被　仰付候處愚臣相撰候人物に無之に付憤り候儀と被思召候との　尊慮

右は昨廿二日八ッ時迄夢にも相心得不申候處奥は右筆一人若年寄部屋へ罷出金右衞門へ明日御用召之由内々爲知候ゆへ金右衞門は早速相引申候愚臣儀驚き候て年寄共へ承可申存候へ共最早退出に付　御前へ罷出御模樣奉伺候得は金右衞門人望を失ひ候に付寺社へ御轉織部右跡に被　仰付旨奉承知一應存意申上候へ共最早

付箋第一

御決し被遊候　御容體に奉承知候間一寸奥御右筆部屋へ立寄候へは其節に至り明日御用之書付見せ可申との事ゆへ更に一見も不仕寅壽宅へ罷越一應存意申述候處春中かの　尊慮にて所詮御動き無之旨其

付箋第二

節庄左衞門再勤□物兼職御免之咄は御坐候へ共庄藏等調役之儀は
御前にても不奉伺惣三郎はぬけそうもないとの御意は奉伺候寅壽ゟも承知不仕候昨夜　御書
にゐ始ゐ奉承知候ゆへ愚臣撰之人物に違ひ候ゆへ憤り候と申儀毛頭
無之事に御坐候

付箋第一
一
本文石川惣三郎を轉　金子孫二郎石川德五郎兩人調役に致度由にて我等ゐ申聞既
に虎之介居候處にて我等認年寄共迄遣し候得は兩年寄相談之上撰ひの違之義は不
存候よし自分好之人に無之段は承知之筈之

付箋第二
二
本文兩年寄相談之上にて定之義虎之介申聞に付勘可申筈無之

一御意にても不可然と奉存候義を諫爭仕候義は御家老の職に候得は愚臣
撰之通不被　仰付候迚も不得已との尊慮
右は前件之通愚臣撰之通不被　仰付候哉否之義に拘り候義には無御
坐候昨日の存意は全く金右衞門ゆへなく御轉に相成候義御政體にお
ゐて以の外不宜奉存候儀に御坐候御意之通り諫爭之職にも御坐候は
ゝ再三言上も可仕所當職之義にも御坐候間一應申上乍併夫のみにゐ
打捨候ゐは恐入候間年寄にも申述候所最早不可救の勢に御坐候間最
早言上も仕間敷奉存候所御尋に付不得已又奉申上候金右衞門儀愚臣
と丸々同意と申にも無之隨分時々議論取合も出來候段は他人も存候
然るに此度御轉しを嘆ケ敷奉存候意味は金右衞門を惜み候には無御
坐候　國家の氣力盛衰に拘り候ゆへに御座候古今和漢御役方に主意
もの揃居之節はたとひ其節は騷々敷樣にゐも實は氣力有之候故にゐ
後世より見候へは明時中興抔相唱へ候義に御坐候扨右主意ものは何
れの世にも進め候は難く退け候は易く御坐候半に無事の時は不相分
候へとも少し變難之場に臨みては平生進み候ものはにけかくれ却ゐ
退き居候者打死等仕候義毎々有之夫故千人之諸々不如一士之諤々と

付箋第三

こゝろのあと

申傳へ如何にも重役の申聞次第何事も御尤千萬とのみ媚諂ひ候人のみ揃ひ候ては國家の大變に御坐候　乍恐御先代之御末年權柄御家老に歸し候は右の主意ものを不殘御遠け被遊候故と奉存候扨亦奸智の重役權柄を握んとたくみ候には第一に右主意者を遠け候義古今一轍に御坐候金右衞門性質は直に過き清きに過候得共當時御役人中には稀なる人物に御坐候間其直と清とを御用ひ被遊其過候所を御差圖被遊候は恐なから　人君の御職掌幷執政の持前歟と奉存候其短をひろひ候はゝ種々有之候へとも其長を申候はゝ俄に御轉被遊候廉には有之間敷寺社御改正に付右奉行被　仰付候との義金右衞門御用人か寺社奉行被　仰付候はゝ御屆きに不相成候へとも若老か下轉仕候ゟは敗軍の將に御坐候間寺社の響き合却ゟ庄左衞門御居置にも劣り可申譬へは佛法の爲にかたきを取候姿にて此上の所實に不容易奉存候殊に金右衞門義寺社奉行との義若老よりもすはり兼候段只今より相

付箋第四

分候樣奉存候

付箋第三
御尋に付云々尋之義は一度も無之全文面之宜迄に認候事之

付箋第四
一古今和漢共云々主意もの揃居候節は騒々敷樣にても云々よりして申事は一々尤認候本文を誰に見せ候ても惡しきとは申間敷能出來候得共□部正介岡野正五郎等政府へ入候はゝ天狗之向を張候に相違無之候故一切不好虎之介の申通りに政府御目付方之向に不成候者斗を好候ては本文の主意とは相違かと存候色々了簡之相違いたし候者も入置候て大夫之申事にても目付之申事にても天狗之申事にても不可然儀には向に成候者は格別に候へ共左樣之者は不好天狗之方へは向に不相成外かのみ句に相成候者を本文之通り申候は如何に存候

一明時中興云々成程尤之樣には候へ共年聞年中改革〳〵迚騒々敷は於政體實は如何之改革之節は騒々敷ても無已候へ共改革終候はゝ平々たる程よき事は有之間敷之

一愚臣儀は　思召を以て御政事爲御聞被遊候得共一體專ら御政事へ拘り候役に無御坐候得は一より十迄申聞通りに不相成候迚右を憤り候は如何との　尊慮

こゝろのあと

付箋（本文申聞候所にては尤に候へ共十目十指之人望失ひ候者は轉候方相當に可有之事

當役職掌之義は執政の取次仕候ゆへ言上仕り參政の取次は不仕夫ゆへ參政の不承ケ條をも當役へは爲御聞に相成候故實有之既に若年寄交代御始之砌愚臣儀多田傳衞門等一同政に付相勤候此意は交代の若年寄へは若年寄丈の儀を申聞同席の平七銀次郎等へは機密をも申聞候事に相成居候處夫にては以之外釣合不宜候ゆへ近來は若年寄にて執政の伺をも仕り愚臣儀は若年寄の手傳を仕候姿に御坐候間御政事之義一分十迄所には無御坐候たとひ事に寄候ては十が十不承候迚も不苦候得とも當職に罷在候内は奥御右筆の存候位の事は相談御坐候ゆも可然奉存候處先つ近き事にて申上候に去春中寅壽大助執政彦九郎御番頭同夏中英臣御用人（其以前御目付之節は勿論）其後安松矢之助御轉忠兵衞正介御抱轉此度金右衞門御博等何れも一年の中御國にては大切の御用に御坐候處一向不相心得扨政府の記錄へは御側御用人中一同判談之上と相認候類甚相當不仕候へ共間柄又は兩派青雲天狗等種々之嫌疑御坐候ゆへ是迄先は默々仕居候得共昨日寅壽申聞候此度之義相談いたし候はゝ六ケ敷可有之と仍ゆ昨日銀次郎宅にて密に評議之上相決候との儀左ほど相談も不相成程の愚臣に候はゝ第一金右衞門よりも愚臣御除きに取計候方可然と奉存候

付箋第五（扨政府之記錄へは云々右之義は虎之介右遠方に居候節我等申候に一同判談と相認不申聞は不可然よし申候へは御御に候へ共每々如此扱のよし申合に相成如本文認候はあまり勝手なる認方之）

付箋第五

一寅壽儀御家老には候得共同役一同判談之上奉伺候儀英臣は御用人ゆへ今日誰御用召に可被出哉も不存義と被　思召候處愚臣儀疑惑仕り右兩人御奉公とは如何との　尊慮

寅壽儀同役一同判談とは乍申近來十の七は寅壽の胸中ゟ出候段愚臣は日々聞見仕候儀に御坐候へ共此度の御用は英臣義相拘り不申段は

乍恐勿論之義愚臣迚も英臣を疑惑仕候儀には無御坐候昨日言上仕候
意味は此先きの釣合を申上候事に御坐候前にも申上候通り一士の謂
々を御嫌ひ千人の諸々のみ罷成候へは其當坐は　付箋第六
上にも御うるさく不被爲在御用相辨し候樣にても權柄下に歸し乍恐
後には差支に罷成可申と奉存候寅壽儀何と申も一國の人才殊に家柄
綠高右位の人を捨候へは如何にも致方無之候故可成丈けは同人の非
は容易申上度無之是迄は一言も不申上候所早く申上候へは寅壽は　付箋第七
公邊の越前守に御座候なくても御こまり被遊又はびこり候ゐも御こ
まり被遊候人物に御坐候家柄綠高之上讀書も仕り第一容貌はわざと
無造作に見せ才智餘程人にすぐれ候間大てひの人にては或は畏れ或　付箋第八
は欺れ申候且年齡僅に廿六才此後何十年執政相勤候も難計候ゆへ長
き分別を仕候ものは皆寅壽の幕下に屬し候勢に御坐候然る所才智勝
れ候丈け己れに勝り己れにさからひ候ものを忌候事甚く皆己れか手

下のもののみ相なつけ申候扨　重役の身の上にては何にゐも畏れ候
事は無之第一　付箋第九
君上を畏れ次に正論を畏れ次に御目付方を畏れ候義寅壽には限り不
申然る所寅壽も江戸同役には肥田大助をくばり（大助を推擧仕候は寅壽に御坐候いかさま大助義兩番頭之内にては先可也には御座候へとも一旦は尾崎喜助一同御役も御免可被遊今迄評義に相成居候ものは引立は寅壽親類故と一番頭抔は申候）扨御目付
出羽次郎は寅壽の親類にゐ相應に議論は合不申由には候へとも御目
附方人物の撰擧は寅壽胸中より出候義不少村上源五郎小山小四郎白
井織部岡本友之介是は寅壽ゐかもし出候には相違無之其他は不相心
得候へとも　付箋第十
上には定ゐ御明察被爲在候御義と奉存候扨亦奥御祐筆にゐ石川惣三
郎義近頃親類に罷成外に内藤市松松葉介之丞兩人抔は皆寅壽年來の
服心に御坐候所追々奥御右筆方へ推擧仕候類既に金右衞門も子年小
石川御燒之節江戸詰先にゐ懇意に罷成手に入りかげんと存頻りに御

推舉申上候所金右衞門義存の外手に入り不申候ゆへ此度御轉之
御意御ためも不申上候類扨右に申上候人物共何つれも相應の人物殊
に一々　尊慮をも奉伺御目付之義は一々　上より御目付へ御懸の上
と申候へは申候樣なるものゝかもし成候所は意味有之第一前件に申
上候手ごろなものを愛し候義以の外不宜此上次第につのり候はゝ不
容易亂勢に成行可申哉と奉存候此義は愚臣一人の過憂には無之江水
與御右筆方は勿論外にゝも最早見つけ居候ものも御坐候へとも如何
にも越前守同樣かけかへに差支殊には何と申候ゝもまさか大臣中の
人才故愚臣抔も度々申上度は存候とも一日〳〵と忍ひ居候義に御坐
候へき英臣儀は寅壽と同日の論に無之乍恐　上の御威光にゝ人も畏
れ居候のみ故國家の大害と申程には無御坐候へとも中々世才に長し
此上余程一と勢ふるひ申度きざし相見申候一體同人義風說をも受候
へとも此虛實は決ゝ相分り不申義に候へとも追々他人に候へは嚴重

付箋第十一

付箋第十二

付箋第十三

にも被　仰付候處英臣は却ゝ御目付間もなく布衣に御引立安松矢之
助は却ゝ下轉仕候程の勢故誰も畏れ候ゝ言上も仕ましく候へとも弘
道館若ひもの抔は英臣を學校へ入候ては學校けかれ候樣抔と迄口々
に惡口仕候由右の如く人望を失ひ候者は何等　御沙汰無之却ゝ右寅
壽英臣等の畏れ候金右衞門御轉しに罷成候樣にゝは實は此先の勢昨
日申上候意味に陷り可申やと憂苦仕候
一自分の存意に不叶候迚相引候は如何との　尊慮
古來ゝ重役の奸人は必主意ものを忌申候何程主意迚も重役に喰付も
かみ付も不仕候へとも畢竟御爲と存候へは身を捨職を失候ても承知
不仕候故重役も憚り候事に御坐候誰れも彼れも輕薄ものに罷成諸々
仕居候はゝ重役への奉公は宜候へとも誰か
上の御味方可仕也
一身の爲に罷成間敷との　尊慮

付箋第十四

こゝろのあと

難有仕合には奉存候へ共身分の義は御直に申上置候間委細其筋へ願出候積に御坐候

右件々　御尋に付存分奉申上候

九月廿三日　　臣　彪誠惶誠恐

付箋第六
本文十の七八寅壽の胸中ゟ出候義不宜とは只今にかきり申聞にも不及其時に大切之事故申聞可然候半
□先之釣り合とはにけ候答か一昨日明日ゟ兩人に御奉公云々と有之英臣は天狗之向に相故之

付箋第七
ケ樣申候へは尤にも聞え候得共了簡事抔は格別に候へ共何程了簡分別よろしく候も一人之謂々ゟは我等千人之方を可取申候衆人之望を失ひ候人を用候は不可然且又一士之謂々とは本よりまけおしみの語と聞え申候

付箋第八
寅壽故存分申候半か虎之介とても誰々へ相談いたし候へは六ケ敷存云々是迄も度々有之候事之

付箋第九
寅壽を厭候義文面書取は妙に出來候へ共實意にあらす權威下に歸し云々抔尤には候へ共畢竟は自分身立行候はゝ恐不申立通し可申候共夫は矢張權柄虎之介握り候心得にて今にても下に有之故之扨又家老にても權を振候は以の外に候へ共其以下にて振候は尙惡し寅壽義は何を申も家柄祿高代々家老勤之者虎之介は町人ゟ引立に相成二代目之ものに候へはたとひ寅壽に任せ權威をふるゐ萬々一國家之爲に不相成候節は不宜なからも我等先祖に對し申譯に有之虎之介へ任せ候はゝ萬一惡敷時は申譯無之戸田寅壽等は我等萬年の後迄も賴置候心得にて申付置候□虎之介は全く才學故當坐働せ候爲に用候人にて我等萬年の後は要路へ指置申間敷人物之

付箋第十
本文目附の撰は目附方にて撰候上我等へ內聽に入れ我等指圖之上にて政府へ出候へは本文之如くとも不存乍然へかもし成候所意味有之よし認候候義は不辨

付箋第十一
如本文かも不相分候へともやはり我等自分見候ては虎之介ゟ天狗を推擧いたし候も同樣と奉存候

付箋第十二
前にも認候通り正介庄五郎等入不申候ゟは虎之介手につき候手ごろ之人のみ入候に相成可申

こゝろのあと

付箋第十三
本人他人に候へは追々嚴重被仰付云々なる程急養子又は左なくても養母年若抔申事にて實になれ合候樣見受候者ゟ出候風聞と又英臣抔は幼年にて養子に參り養母と申も六十計にて且英臣義毎々惡場所へ參り候義も一切無之候所三浦岡崎等ゟ出候風説之由にて其比承り目付ゟも出不申候全三浦奸物にて同役之節は三浦右役に有之候所三浦は町奉行へ拔吉野は目付へ拔候て又用人に成候を殘念に存出候か共承り申候つき岡崎義は英臣へ取入可申と存候所をつき拂候挨拶致候を惡候歟にも承り申候つき右等ゟ出候風説を其まゝ察も不致取用候義も相成兼申候

付箋第十四
外にては安松義英臣之沙汰を申付候に付退役と申候よしなから右御目付には承知之通り天狗にて用もれ候故轉候事之
一桑原幾太郎抔は於好文亭士道を失ひ候得共軍用掛りに相成候抔は全く天狗故之右は衆人眼前に見候事なれ共被爲召候節に候へは御咎も如何歟御目付ゟ風聞出不申内とて如右相成候天狗に無之候はゝ被爲召候節と申尙々嚴重なるへし

昭和六年六月二十日印刷
昭和六年六月廿五日發行

水戸藤田家舊藏書類第二

非賣品

後藤仙太郎藏版

不許複製

東京市四谷區新堀江町三番地
日本史籍協會代表者
發行兼印刷者　早川良吉

新撰 ロシヤ文法

[illegible]